

數度、停車の度に目をさます。間もなく眠ることを断念して早くも洗面所に行く。

汽車は清松附近をころ／＼と音を立静寂を破つて三島に向つて眞一文字に突き進んで行く。静岡も／＼直だ。とはるか彼方の朝霧の中にぼんやりと浮んでゐる白扇道にかゝる山

おゝ！これぞ世にはこり且又外人すらその神々しさ、森厳さに打たれて、その秀を愛でる富士の靈峰。吾々はその秀峰を目前にながめてゐるのだ。白雪を頂だき、中空に浮ぶその神々しさ、森厳さはいかに稱すべきか。なだらかな曲線の表はず白扇の如き容姿、言葉も發し得ない。霧の晴れるに従ひ裾野の絶景が現はれる。昔頼朝の巻狩をしたのはこの邊だらうか。仁田四郎の猪を殺したのは何處か曾我兄弟の仇討をしたのはどの邊だらう、等背をしのぶ冥想にふけた。これに對象するかか、田子ノ浦の波状の海岸には、偉大なる太平洋の海水が音を立て、寄せては返してゐる。又漁村總出て地引網を引いたり、朝日に照されながら漁船をあやつつて出て行つたり忙しうだ。今頃は太漁だとのことだ。其の上吾々の心をおどらした事は、波荒き海上に、吾が海軍の精銳がマストを霧の中から

表はしてゐることだつた。これを見た時、吾々は一種いふべからざる感じに打たれたのであつた。汽車は太平洋の波荒き田子ノ浦の海岸に沿つて突走り、車中は下車の用意に騒々しくなつて来たのであつた。やがて汽車は三島驛にすべるが如く停車した。時、當に午前六時二十四分。

直に下車。電車に乗換、同三十分、三島町に向ふ。車窓よりの景色、見なれぬ事多く、珍しくもあり又面白くもあつた。富士の秀峰未だ消えず、車窓の右に表はれ、左に表はれどこ迄も吾々につきままとつた。その中間三十分、三島町に着く。

こゝに始めて旅行の第一歩を印したのである直に整列、これより箱根八里を越えて元箱根に至らんとするのである。列の前後には先生達がついて行き始めた。富士は晴れた空に浮んで、どこ迄もついて来て、吾等の苦しい箱根越を慰めてゐるかの様に思はれる。山の傾斜面に嵐のあるのは湖國では見られない珍しいことだ。その中に、車中の睡眠不足の爲にだん／＼足が重くなつて来る。その頃になると、そろ／＼列も落伍者が出来て長く延下始めた。足の達者の者は早く行き、弱き者は後

動車で行きたいなあ。「不平たら／＼細い道を登つてゆく。上衣をぬいだ。シャツは汗でびつしよりとぬれてゐる。前方の坂道を白い物が動いてゆく。どの邊が先頭だらうか。やがてあへぎながらも頂上のやうな所へ来た。こゝに無線電信局があるからこれが頂上だらう等思ひながら行く。箱根を越したか否かはこの向ふに湖水即ち蘆ノ湖があるかないかによるのだ。あゝ。湖があるやうに。まるで恐ろしい物にでも近づいて行くかの如く、氣味悪い様にだまつて行く、その時、一塵の風と共に僕の目に入つたのは、外輪山にかまれどこ迄も青く澄んでゐる蘆ノ湖の水であつた其時の喜び、安心の心、一語になつてはゝえまずにはゐられなかつた。後を振り返つて、「おーい、蘆ノ湖だぞ。」「ほんとか」と半信半疑の顔でとんで来る。そして湖水を見て、おゝ、と膝を出し、につこり笑ふ。喜の心は誰も同じだ。午前十時三十分頃、氣持よき湖水の絶景を満喫しながら、晝食を取る。やつと生き返つたやうだ。

唯少しばかりの石がきに側に松があるばかり曾我兄弟をまつる箱根神社に参拜、寶物殿に入る。湖岸に戻り、汽船で蘆ノ湖を縦断し湖尻に行く。船中から外輪山をながめながら、又先刻越えて来た方をながめ、苦しかつた事を思ひ返す。冷たい風に吹かれ、汽船のゴト／＼といふ音にれむりをもよほされ、あちらでもこちらでも、こくり／＼とやつてゐる。もつと／＼長くのつてゐたかつたが、間もなく湖尻宿、直に整列、又もや山道を通つて大涌谷に向ふ。汽船の中の氣持よさは何處へやら又もや汗だく／＼、やつとこさで着いて見ると、もう／＼と白煙が上り、氣持の悪いにはひが、ぶん／＼と鼻をつく。後になつて聞いたことだが僕等の行つたのが八日、その翌々日、即ち十日の日に爆發して一人惨死したとのことだ。今度はやつと宿へ向ふのだ。しかし又山道だ。げつそりする。しかしゆかざるを得ん。元氣を出して歩き出す。その道の危さ、足の直ぐ横はもう何十尺といふ崖だ。おまけに石がごろ／＼してゐて危くて危くて仕方がない。其の中に道が下り坂となつてやれ／＼と思つた。今迄は早く上り坂がなくな

になる。一体どの位延びるのだらうか。新道は樂だが、大分迂迴してゐるので、舊道を行くことにした。舊道は近いがそのかはりに大分急だ。その上石が敷きつめてある所があつて、すべつてつらいこと此の上もない。こうなると何處でもいゝから近道がしたくなる。遂に木のない草ばかりの所へ出たので、亂暴にも舊道さへも行かず、頂上らしき所にある無線電信局の塔を目標に、どん／＼進み始めた。山中のことで水もあまりなし、加ふるに太陽は夏の如く直射し、のどはかはき、休はつかれ、これで越えられるかしらん、といふ弱氣も起つてくる。足のつかれとあつざと

で、もう富士も何もあつたものでない。早く頂上迄着きたい。苦しい、辛い、といふ丈で物を考へる元氣もない。一つの山を越すと又もや次へうね／＼と續く峰が現はれる。その時の氣持といつたら何とも表はしやうがない未だ午前九時といふのに空腹の餘り晝食の弊當をたべてしまつた者も多い。道て人に「もう蘆ノ湖迄どの位ですか。」「未だ二里以上ありますよ。これで未だ半分と少ししか来てゐませんよ。」「へえ、これで半分ですつて。」「あゝ、白

ればいゝが、と思つてゐたが、今度は早く宿へ着きたかつた。辛いながらも、途中、硫黄湯のプールや風呂等を見た。そして吾々が箱根を越える時から待ちあぐんでゐた宿についた。安心と共に一時につかれが出てねむたさ迄も感じ始めた。元氣を出して、學校や家や友達の家へ便を書き、書き終つてから、身体を延し、今日の苦しかつた事等を語り合つた今日のつかれをいやさん爲に風呂へいつたが大混雑で入れるどころのさわぎぢやない。その中に夕食の報があつたので、すき腹をかへて、吾れ先にと食堂へ突進する。多くの者が會合しこの食事程、愉快なことはない皆が今日の空腹を満さんと、競つてたべる。物凄いいきはひだ。夕食後は自由だが、宿屋が四五軒しかないこゝでは外へも行けない。手持無沙汰な時を、宿のビンボンで過した。しかし八時頃には皆暗天を希ひつゝ、寢についた今日の疲を取り返し明日の英氣を貯へんが爲に。(國枝理)

第三日(五月九日)

除々に障子が明るくなりはじめた。未だ皆よくねむつてゐる、すーすーと安らかな寢息が聞えるばかり、昨日の箱根征服に餘程

疲れてゐるらしい、しかしその静けさも長くは續かなかつた。次第に静寂から喧嘩へと變つていつて第三日目は完全に開け放れた。初めて味は宿屋の朝食もあはたゞしく第三日目の旅装を整へて、一夜の夢を結んだなつかしい松坂屋旅館を出發したのは六時半頃だつた、喜びに浸る吾等百餘名を乗せた數臺の自動車は清らかな朝霧を踏んで滑り出した。山村の朝風を切る爽快さよ、新鮮な空氣が肺の底までしみ渡る。長々とうねつてゐる箱根の遠山は朝靄の中から目覺めかけて、薄紫にぼかされてゐる、道端の草木まで眠からさめて活動への用意をしてゐる。やがて自動車は幾度も急なカーブを経て小湧谷に着く今日のコースを思ふにつけて何だか胸がぞくぞくする、待望の江ノ島!! 歴史的古都鎌倉!! 午前七時三十分小湧谷驛を箱根登山鐵道で出發、先つ小田原へと志す、除々に電車が急勾配を下り始める、何しろ數百米の高地から下るのだもの、幾度もくく曲りくねつて、早くなつたり、遅くなつたりして降つてゆく、長いトンネルを幾度も越えたとそこにレールがおそろしい絶壁に沿つて横つてゐる又トンネル、又鐵橋、右手には山が高く聳え、左手は底し

れない様な深い谷に臨んでゐる。眞に胸がどきどきする、暫くすると早川の急流が兩方からの山の迫つてゐる所に見えて来る、所々に白龍を躍らして翡翠の様な水が巨岩にぶつつかつて眞白な飛沫を擧げてゐる。その美その壯。何んと云はうか。間もなく電車は小田原市内に入る、睡眠不足な吾々は動もすれば思はず知らずこくりとやり出す。午前八時三十八分小田原着、之より省線に乗りかへて藤澤に向ふ。走馬燈の如く移り變る湖南の景色はまるで繪の様な、相模灣は朝日を受けてきらきらと金波、銀波をきらめかしてゐる、漁船が二三ツツ鮮かに名残をひいて沖へ漕ぎ出してゆく。國府津、大磯、茅ヶ崎を過して、九時三十五分藤澤着次いで片瀬に着く、驛より五、六町歩くと、長い鐵橋が見え、江ノ島が見えて来る。愈江ノ島だ。一同海岸の砂上を下りて新緑の江ノ島を背景に記念寫眞を撮る、皆の氣取つた顔、寫眞屋の滑稽な様子、すべてが朗かだ。

白くおどる波頭、沖合に風を孕ませてゐる白帆、鐵橋にびちゃ／＼と傾下で當る波水、それがずう／＼と伸びていつて、その上に擴がつてゐる澄み切つた大空に續いてゐる。さうして長い鐵橋の盡きる所にうつくしい江ノ島で春霞に閉ざされて、岸邊に寄する波音を子守唄と聞いて静に眠むつてゐるではないか。

濕つばい潮風が颯つと頬をかすめ去る。江ノ島はだん／＼近寄つて来る。やがて長い鐵橋も盡きて一行は島に入る。少し石段を登つて行く、兩側に古木が老軀を支へて何んとなしに嚴な氣分をたゞよはせてゐる、そこにあるお宮に參詣して又石段を登る、行くにつれて物賣店が殖へて來て嚴な氣分も次第に何處かに散じて失ふ、今度は石段を下りて廣い平な大きな岩の上に出る。その岩の上を僅かばかり歩いて行くと大きな洞穴の前に來て、一同その中へ入る。奥の薄暗い中にちら／＼と燈明がかややいてゐる、辨財天が祀つてあるさうな、それを目標に進んで行く、兩側の岩はぬる／＼ぬれて、ぼた／＼としづくが落ちて來て、ぞつとすんなり氣分に捉へられて了ふ、その穴の中はあちらこちらへ音が響いて

みてやゝこしくなつてゐる、外へ出て來て始めて人間らしい氣持に歸つた。暫く休んで再び元來た石段を登つて、ぐるりと島を一周する。遠くの方に繪の様な町が眠つてゐて、眞白な波頭が列を作つてさつ／＼と覆つてはすいとひいてゆく。

江ノ島惠日庵の室を借りて、美しい景色を見ながら晝食をとる。

愈江ノ島を去るのだ、せめてもう一時間位でも……。又長い鐵橋を渡る、渡り切つた時はもう一度振り返つて見た。無心の江ノ島はやはりすや／＼と眠つてゐた。さらば江ノ島よ之が見おさめだ。

午後一時半頃片瀬を電車で出發す、腰越、龍ノ口、由比ヶ濱、七里ヶ濱、稻村ヶ崎、等當時の様子を偲びつゝ過ぎ去り、長谷に着す驛より眞直ぐに三丁餘行くと、眞正面に露座の大佛が三丈餘の巨軀を靜に鎮坐して居られる、眼底に何か尊い物が宿つてゐる様だ、非常に神々しい慈悲深い顔をして少し前にのめつて居られる。懐からその胎内を見見すると何んの事はない、たゞがらんとしてゐて、後の方に梯子と明を探る爲に小窓が一つあるだけの物だ。少し元來た道に戻つて横にわつつか

許折れると長谷の觀音がある、之も三丈餘あるとか、ちつと見入つてゐると、どこからともなく尊嚴と親みとが湧いて來る。

再び車中の人となつて鎌倉に着く、廣い並木道を通つて、先ず鶴岡八幡宮に詣つ、左手に大きな銀杏の木が承久三年正月二十七日の慘事を物語るかの如く高く聳えてゐる、一同そこで記念寫眞を撮る、砂利を踏んで八幡宮を去り、願所の墓に向ふ、寂しい山陰の石段を少し上つた所に苦むした彼の墓が悄然と立つてゐる、一生涯惠まれず、初から最後まで運命と戦ひつゞけ終に大將軍とまでなつた、然しその地位も自らの猜疑心の爲に自ら崩して了はねばならなかつた孤獨の英雄、英雄の悲しき末路を偲び、坐るにまぶたの熱くなるのを禁じ得なかつた。次いで鎌倉宮に至り、土牢を拜觀する。牢はさびしい山かげに堀られてあり、大變狭く汚い所である、この中で尊い御身を持ち、大志を抱いて空しく斃れ給ふた大塔ノ宮の御心を偲び奉つては再度まぶたの熱くなるのを感じつゝ宿へ急いだ。

鎌倉の夜は静寂その物だ、數奇な運命に彩られた鎌倉だ、家々は何も知らずに無心に眠りつゞけてゐる、丁度満月が靜かに鶴岡八幡宮の屋根の上から人目を忍ぶ様にさびしい光を地上の總ての物になげかけて再び古の姿に引き戻さう／＼としてゐる様だ。(西村正作)

第四日 (五月十日)

鎌倉の曙漸く白く、太陽は九天に躍る。空には一點の雲もない。勇んで電車で出發したのは七時四十六分。一路須賀谷へと進む。

鐵路を挟む重疊の線濃かな自然美にうたれる事僅かに十四分、やがて須賀谷に着き、軍港見學に向ふ。町はかなり大きく道路も幅廣く往來は頻繁である。軍港に到着する。門前の警戒物々しく、我々一同は衛兵に敬意を表し、二組に分れて軍港内に入る。

最初に見學したのは軍艦の母ともいふべき造船所である。鐵板接接の騒音と左側に聳ゆる鋼鐵製造船臺の規模廣大なものと驚嘆する而も騒音のために案内人の聲は明かでない。次にドック内に於ける艦体修理の甲斐々々しき様は如何に一同の心を刺戟した事であらう軍港の海面は鏡の如く、新緑鮮かな山の影を映せる灣こそ軍港である。其の山の麓には追濱の海軍航空隊の緑に映ゆる格納庫在り、折柄來る數臺の飛行機!! 頭上高く盛に攻撃演習

をなす。心躍る。實戦ならば如何に壯烈ならんかと思ふ。軍港の左方遙かには運送艦、驅逐艦右方には世界に誇る航空母艦赤城沈泊す、其の雄大さ絶てを忘れて見入る。將に我が海軍の世界に冠たるも宜なりと覺えた。軍港の見學は終り、是より軍艦山城拜觀に赴く。吾等て釜山港に於て初めて拜觀したも此の山城であつた。因縁深い軍艦である。此處に再び同じ軍艦に接して親しみの念を起した。先づ手紙の消毒をなし、いかめしく警戒して居る番兵に敬禮して甲板に上る。甲板の中央部に於ては白い服の水兵たちが鍛冶屋の様な仕事をして居る。艦の前後を覗む主砲、空を覗む高射砲は一同を喜んで居るやうに思はれた。それより艦内の見學。一同急傾斜の階段を恐しうに下り艦内に入る。艦内を縦横に輻輳して居る赤、白のパイプ、彈丸の通路皆我等を驚かす。一室一室毎に案内人の説明を聞く、調理室では十人餘の者が盛に食事の用意をして居る、その傍に電氣による大釜が備へられてある。廊下薄暗く不安さうにせざる歩をしつゝ進む。或廊下には銃、劍が厳然とかけられてある。大体の見學を終り再び急傾斜の階段を上つて甲板に出た。此の時案内人

に追憶を新にす。それから日本に二つしか無いお釋迦さんを拜み、堂の上に懸かゝつた繪畫を見、過ぐる大正十二年の震災が、わけてもこの被服廠跡の如何に悲惨なものであつたかを想像し、この様な惨事の再び起らぬ事を祈りながら館外に出る。先づ目に付くのは「悲しみの群像」だ。

あの震災の爲、親とも別れて悲しく死んでいつた小學生、幼兒の像だ。これは全國の小學生の零細な蠟金に依つて、その靈を慰める爲に出来上つたものださうだ。

再び車上の人となり、吾妻橋を渡り、橋の形の種々様々なのを面白く見て、漸く見覺えた上野驛附近を通つて、上野公園に至る。犬を連たれ西郷隆盛の銅像を見、車止めの所から引返す。狭い廣小路を通り、日本橋通りを経て銀座通りに出る。存外きかない街だが、それでも青々と若芽を吹き出した所謂銀座の柳を左右に見て、東京驛を裏から拜見、中央氣象臺の前で標準時に時間を合せて、靖國神社に向ふ。下車して先づ九丈五尺の大鳥居が僕等を迎へてくれる。石造では日本一ださうだ。社前に一同整列、護國の鬼と化せし我が忠勇の將士の英靈を慰めた。遊就館は拜觀出来な

が主砲を指さして、「此の砲が三十八センチ砲である」と言つた。此の言を聞いて其の偉大に驚く。一同甲板に集り記念撮影をなす。此の横須賀軍港見學約三時間、その價値の多かつたことを感謝す。名残惜しい横須賀を後に、電車で東京に向つた。空少しく曇る。車中で晝食を済ました。

京濱工業地帯にさしかゝる頃より雨少しく降り出した。此の邊一休は平地で、此の所に流れる多摩川以南には平屋多く、此の川の鐵橋を過ぎる頃より大建築物を見受けることが出来た。新橋驛に到るも未だ猶々雨は止まない、皆の者は力を落した。心配のうち午後〇時十八分東京驛に着す。

東京驛にて浅川行電車に乗り換へ、多摩御陵参拜に向ふ。午後四時頃浅川着。是より數臺の乗合バスにて濠雨の中を進む町の道路廣く、町の内を電車が通ずる。御陵入口にて下車、是より三々五々御陵前に到る。此の邊の樹木皆杉となり心清らかになる。御陵前に整列した時、自然の壯嚴さに感化せられ頭自然に下る。再びバスにて浅川驛に引き返し、四時頃出發す。雨猶止まず、五時頃上野驛に着す。大東京

かつた。社側の大村益二郎の銅像をふり返りつゝ、明治神宮に向ふ。右手にドイツ大使館文部省(小さいのに驚く)國會議事堂の本建築を見て、赤坂離宮の御門前を通過。この離宮はルネッサン式でルイ十三世の粹を集めた實に立派な建物で、只今は御住居なく、外國の貴賓の御宿に當てられてある由。

間もなく明治神宮前にストップ。参道の兩側の森林は全國から集めた種々の樹木から出来てゐるさうだ。玉川砂利をザク／＼と踏みながら社前に至る。一同整列して最敬禮。又自動車に揺られて、右に外苑の競技場、球場を見て、乃木邸に向ふ。豫ねて御質素とは聞いてゐたが、之はまた驚くばかりの質素な邸宅で、將軍の御居間、御夫妻殉死の室等、僅か四疊半位の狭い部屋で、自刃なされた位置も示されてある。横に有る煉瓦造りの馬部屋の立派さに將軍が如何に馬を愛されたかを偲び、粗末な邸宅との對照に感々、將軍の偉大な人格に感激しつゝ、裏なる乃木神社に参拜す。續いて自動車は今日のコースで一番大切な宮城に向ふ。下車して三重橋前に整列し松の間の遙かに皇居を拜して、思はず橋を正す。日本臣民と生れて今眼のあたり皇居を拜

の夕陽迫り、ネオンの光を身に受けて、初めて大東京の地を踏んだ。是より東京驛に入る懼れの東京。(有川幸久)

第五日 (五月十一日)

漸く疲れ初めたのが起床が遅くなつてゆくあゝ今日も雨だ。折角の帝都の見學も雨かと思ひながら、障子を開けて見ると、何んだ、雨と思つたのは庭の泉水の音だ。有難い。青空に白い雲がふわり／＼と浮いてゐる。僕等は何んと天氣に恵まれた旅行の幸運児だらう朝食後、街に出てみる。早や自動車は流しておる。都會獨特の喧噪も今は楽しく聞える。間もなく二十二人乗りの大型遊覽自動車五臺に分乗して市内見學のスタートを切つた。

左右の大小ビルヂング、商店等田舎者の僕等には眼新しいものばかりだ。案内嬢の説明に感心しながら、有名な兩國橋を渡つて角力で名高い國技館の丸い屋根を右に見て、間もなく被服廠跡に着く。正門の右手にある黄色な建物が復興記念館で、中へ入るや怒々悲しい、重苦しい氣につゞまれる。憶へば十年の昔、一瞬にして五萬八千の生命を奪ひ去つた悪魔の悪戯を憎まずには居れない。その精靈の安らかに眠るこの莊嚴なる殿堂に詣て、更

する喜びの上はなし。振り返り／＼やがて有名な、高村光雲外二名合作の楠公銅像を見る。實に立派なもので、東京市中に數ある銅像の中で、最も技巧の優れたるものださうだ兜の中に雀が巣をつくり、チユテ／＼と忠義を稱へてゐるのも面白い。井伊大老の水戸浪士の爲に果敢ない最期を遂げた櫻田門を見る。我々彦根のものは一入感慨無量である。次に愛宕山に到着。疲れてゐるので急な石段を登るのが非常に辛い。これでも昔、曲垣平九郎が馬で登つたのかと呆れる。西中尉でも及ぶまい。A区のアンテナが高く聳びえてゐる。東京一番の高所で、こゝからは市内の五分の一といはれる市街を展望し、首相のモダン官邸も遠く見えた。チヨット拓務大臣官邸によつて、車は高輪泉岳寺前にストップ。先づ右手に義商大野屋利兵衛の大きな石碑があり、淺野内匠頭、遙泉院の墓標が二つ列んで建つてゐる。それより少し高い所に有る四十七士の夫々の名を記されてゐる墓表を讀んでゆく。主君の仇を報じて潔よく自刃し果てた武士の鑑、義士の面影を偲ぶ。今に香煙は縷々として絶ゆることが無いといふ。村上喜彌の墓も義士の墓と並んで葬られてゐる。愛宕山のサ

イレンが十二時を告げた。腹の虫は感々治まらなくなつてくる。

直ちに拓務大臣官邸に赴く。御殿の様な美しいホールで晝食(饅頭)を頂いてみると彦根の生んだ大政治家、拓務次官堤康次郎氏が悠然とおいでになつた。食後御菓子を頬張りながら尊き氏の立志傳、御訓話を聞き、後、庭前にて氏と一緒一同記念寫眞をとつてもらつた。御禮重なるもてなしに感謝しながら此所を辭して、最後の見學地たる朝日新聞社に向ふ。もう車窓の景色に厭きたのか皆眼をうな顔をしてゐる。やがて大きく「朝日新聞社」と浮き出したビルヂングの前に下車。直ぐエレベーターで屋上へ出て記念寫眞を取るカメラマンはえらい氣取つて、タバコを吹かしながらあつさり寫してしまつた。さすが大新聞社の寫眞班だと感心した。そこで案内人の新聞についての話を伺ふ。この建物は屋上共に七階で、七階は展覽會場其他、四五階は大講堂、三階には社長室、貴賓室、食堂等があり、新聞の事務は一二階で行なはれてゐる出。それから案内の人の後について一階一階下りて行く。四、五階の大ホールにはいざゝか驚く。二階では僕等が行く時、丁度今日

の夕刊を刷り初めて居た。輸轉據の國産品に一秒間に三十七枚、外國製は二十九枚。しかも國産品の方が安いのだ。實に速い。大きな一巻きの紙が機械の中へ入つてゆくかと思ふと、一方ではもう新聞として縫製に疊まれて出てくる。何十枚、何百枚、何千枚ともなく次から次へと出てくる。あちらでもこちらでも廻り出すと實に壯觀だ。給葉書を一組づゝもらつて、宿に歸る。

あゝ今日のこの憧れの帝都見學も遂に終つたのだ。羨なく、宿に着いたのが三時過ぎ。夕食後自由解散。三々五々出てゆく。親類の者の迎へにくるのも多い。僕も友達と五六人で遊びに行く。九時半歸宿。明日が早いので直ぐ就床。電車の響が耳にさわる。帝都の夜もだん／＼更けて行く。(島井記)

第六日(五月十二日)

眼が醒めると五時である。數日の旅行の爲疲れたのか、ねむそうな顔をして起きるものもあるが、大抵は安らかに眠つて居る。

流石に大東京だ、早活動の火蓋は切られてゐる。電車の音も自動車の音も、それは凡て自然に挑む戦争のやうだ。

著いた。我等は尙元氣旺盛で、驛前で自動車に分乗した。自動車は快速力で前進し約二分にて山麓に到着した。

石段を登り、茶屋に荷物をあづけ、一同勢ぞろひをする。一同は適當に分れて數人の案内者について東照宮に入つた。石鳥居をくゞると左側に五重の塔がある、朱塗で美しい。

——こゝに見えるのは三神庫と申します、何れも枚倉造であります。上神庫切妻にある浮彫にした二頭の大象は狩野探幽の下繪になつて居ります。この三神庫には百物揃といふ渡御祭の御道具が入れてあります——と表門即ち仁王門を入つた時、案内者はかう説明した。尚進むと神饌に造る、欄間には所謂三猿がある。

次いで鍋島公廟上の御水舎や其他の大名小名の廟上に係る燈籠を見る。

石段を上ると立派な青銅造の釣鐘堂がある。オランダの廟上ださうだ。朝鮮の廟上物もあつた。これらの廟上物を前にして儼然と厳然と控えてゐるのが、日頃少からず撞撞してゐた陽明門である。實に美を盡し粹を凝めてゐる。人工と自然との融合調和の偉大な一現象である。

案内者の説明により「魔よけの道柱」も注意して見る。陽明門をくゞると次に唐門が控へてゐる。神輿舎を拜觀し、拜殿に入る。拜殿を出て眠の猫を見る。

それから石段を下りて寶物殿を拜觀する、それから石段を下りて寶物殿を拜觀する、刀、書簡、工藝品其他種々賞讃に價するものばかりである。

一同は寶物殿を出て約一時間の解散を許された。時に十二時十分!!!

晝食後一同集合、バスに分乗し馬返し驛まで来た。こゝで小型自動車に乗換へて中禪寺湖に向ふ。

自動車はうねつた登山道を上つて行く。四邊の風光は實に明媚といふよりも剛險である。途中下車して華嚴瀧を見る。併し僕等の行つた時は中禪寺湖の水が乏しいとか水が出てゐなかつたのである。如何に物凄く男性的であるかと胸をおどらせてゐた、我等の期待は全く裏切られて我々は軽く失望せざるを得なかつた。

我等は更にドライブして三時二十分遂に中禪寺湖についた。二十分の休憩は間もなく過ぎて三時四十分再び自動車に乗り歸途につく。だん／＼おりて行くと他の中學校や女學校や

藝て皆は起る、蒲團はたゞまれる、それから勿論、朝飯である。飯なくしては、然し今朝は日光へ向ふのである、従つて早く出發しなければならぬので、我等一同の唯一の樂とするこの朝飯も一杯二杯で宿を出なければならなかつた。

午前五時五十分。旅館前に勢揃をしてすぐそこに見える上野驛即ち大東京の裏支關に向ふ。

六時五十分!!。汽車は悠々と揺き出した。東京にて蒸氣機關車を見たのは始めてである。

時代の尖端を行く大東京には到底蒸氣汽關車などとは見られまいと思つてゐた。それだけに蒸氣機關車に對して深く懐しさを覺えた。

汽車は帝都を後にして、北へ北へと走りつゞけた。關東平野は漸次目前に展開しつゞ、都會の厚つぱい空氣に陶醉した、我々に或る野性的な清新さを與へた。

車内は再び修學旅行に於てのみ味はれる長閑さ一杯になつた。久喜を過ぎて間もなく古河、八犬傳の一節も思ひ出される。宇都宮を過ぎると、づん／＼と山に入つて行く、始めて關東大平野を走破したことを知つた。午前十時二十七分!!。汽車は目的の日光驛に

小學校まで玉の汗をかいてあへぎ／＼登つてくる。

自動車は三十哩の快速力をつゞけて遂に日光驛前についた。(島井澄)

第七日 五月十三日 晴

期日は十三日になつてゐるが、十二日日光出發の時より書く。

十二日午後六時十分 我々は最後の見學の地日光を後にした。夕靄に包まれた二荒山に見送られて、我々の列車は刻々故郷へと進んで行く。車中は雜誌を讀む者、日記を書く者、土産物を開ける者、話し合ふ者、トランプをする者、ハイモニカを吹く者種々様々である。我等の七日間の旅行も今將に終らんとしてゐるのだ。第一日の車中の一泊にて睡眠不足の我々が第二日の箱根、大涌谷踏破に向つた時の意氣は、誠に悲壯とも云ふ可きものであつた。何處迄行つても山又山の箱根、其箱根を越した後の大涌谷突破、我々は後になつてよくもまあ越せたものだ、自分ながら感心せずには居られなかつた。それから鎌倉、江の島、多摩陵參拜、東京市内見學、日光等總ては、も早過ぎし旅行の思ひ出と共に美しく樂

いが、智識を系統、組織立てる事が出来ず諸君は何事でも系統立てる事が大切で。僕のクラス、メートの某君は鹿兒島二中の出身ですが、不幸にして浪人を二年間やりました。彼は或時僕等に次の如き価値ある経験談をしました。それは、四年生の時色々の受験雑誌から勉強方法を研究した中に、一高突破の受験記中に熟讀より多讀の標語に迷はされ、断然多讀主義者となり、四年生の時英語、國漢の参考書十冊位をザッと目を通しただけで受験したさうです。しかし駄目。五年生の時も四年生の参考書を重復して受験又破る。かやうにして失敗に失敗を嘗めた彼は、某豫備校の先生から精讀を進められ、遂に本年榮冠を得たのでした。これは一例に過ぎません。しかし生々しい血恨涙恨の跡ではありませんか。しかし精讀が必ずしもグッドではない。と言へば迷ふてせう。しかし一得一失です。これは主に僕の勉強観念でした。抽象的ですが。即ち具体的に言へば、一日五語主義で英語の單語を暗記しました。若し一年中やれば實に千八二五語となり、大抵の難語は出来ます。數學にしても三題やれば、一年では千九十五題となります。かやうにして頭に入れるやう

にすれば、必ず實力はメキメキとよります。それから、俺は文科だから數學はかまはん、とか、理科だから國漢は問題ぢやない、とかの様な淺はかな考は禁物です。文科の人でも英語が駄目だつたが、數學が滿點に近かつたと云ふ人なんかでも、完全にパスが出来ます理科も同様です。しかし、文、理科何れに行きにも英語の實力がなければ、駄目です。入學してしまへば、獨語又は佛語が加りア、ペー、エーとかア、ベ、セー、等も加ります。さうすると、それに必ず英語が付きまといひます。で高校は要は語學の學校と云つて過言ではないと思ふ。實際英語の實力がなければ、入學して後、泣く位つらいさうです。ものすごいリーダーを一日に三、四頁めくらされるのである。それ所か試験には五十頁以上の英語の考査に苦しめられるのだから、殊に文甲は英語だから、この志願者は充分英語を、マスターする必要がある。殊に文法の智識が最重要です。

最後に、受験勉強を過度にして、神經衰弱になつたと言ふ人は實に愚の頂である。即ち左様な勉強は一文の價もない。願はくば諸君よ！諸君のベストを盡し、体育に、勉學に、働けられ来るべき聖戦を見事突破し、來年の四月からは、ホワイト、テーブの高校生や又専門學校生とし、將來日本の有爲なる人物となるキヤクスターを養成しやうではないか！！頑張れ!!!ベストを盡して!!!さらば幸あらん事を。(八、十一、七)

湖國に於ける

ポオーリス氏苦闘史

第四三回卒業生 淺島 希一

白駒の隙過ぎ易く、學窓を築立つてから早や二年有半の年月が流れた。予等の後に早や二つの新しい先輩團が増えた。

卒業式の答辭に何を誓ひ何を叫んだか知らないが、僕等はたゞ何の考へもなく、社會の荒波の中にその漣たる身体を傾へて、流れ行くくまゝに其日／＼を送つてあるといつてよい大なる抱負と希望とを抱いて社會の第一線に

躍り出た吾々だつたが、先づその餘りに複雑にして廣漠たる世の中を知るに及んで、まご／＼と自己のみじめさと無能さを知覺した。

併しそれは總て向上進歩への段階だつたと云へやう。未だそのアットラインすら知り得ざるも、牛歩にも例ふべき歩みを續けつゝ、あるは事實だ。

予の居住地八幡は舊幕時代を其儘の隱居地で靜かな町だ。安土の城下町を京に倣つて移したといはれる街路は碁盤の目そつくり美しく縦横に通じてゐる。

街の西北に聳る八幡山は比牟禮山又は鶴翼山ともいひ、關白秀次の居城であつた、頂上には城跡あり。その眺望は安土の八角平以上で、津田の入江の夕景色など、人をして轉た陶仙に遊ぶの思あらしむるものがある。

此地は予の事實上の故郷である。予は小幡町上で生れた。八幡町を語るに當り忘るべからざるは米人ウイリアム、メレル、ヴォーリス氏を盟主とする近江ミツシヨンの事だ。

明治三八年二月の或日當時二四才白面の青年だつたヴォーリス氏は八商の英語の教師として赴任すべく近江八幡驛のプラットに降り立つたのだつた。

八幡がどつちにあるかも分らなかつたヴォーリスさんにとつてそれから後の三日間は最も悲惨な月日であつた。言葉は分らぬ一國情は無論、知るべくもなく太陽の入りぬ薄暗い屋根の低い陋屋にとお籠つて、風尙冷き如月の夜を一人淋しく過された。泣くにも泣けぬ天涯孤獨の幾日だつた。

併し三日四日経つと元來親しみ易い氏である、その教授振りなど慕つて二三の學生が遊びに来るやうになつた。

そして氏の人格と基督教の教旨とを慕つて集る學生の數は日に／＼増してバイブルクラスを形成した。氏が八幡に來た當時は非常に深淵な所で、八商(當時は遊藝商業)の生徒でも酒も煙草も飲めば女遊びもするといつた者が多かつたが、氏は此等の青少年を一人々々性格に應じて陶冶し、爲に二三年を出でずして學生の氣風は餘程よくなつた。

併し、何處にも反對派といふものはあるもので、佛教信徒の學生達はバイブルクラスの盛んになると、共に色んな迫害を氏及氏の感化を受けた學生達に對して加へた。何といつても今日と違つて基督教に對する認識は全く觀念的な反對は相當多く、その反對は一遊藝

商業暴行事件」とまてなつたが、此の迫害の中に敢然として立ち、常に氏を助けてゐた學生の中に今の近江ミツシヨンの理事たる吉田悦藏氏もあつた。

赴任後一年にして氏は病魔に襲はれ米國へ歸國されたが、半年後健康を回復して歸つて來ると早速青年會館を建設された。然るに氏の留守中東本願寺の佛教青年會が盛になり、バイブルクラスは跡方もなくなつてしまつてゐた。

近江ミツシヨンの歴史中此時代が一番淋しい時で吉田さんと二人きり氏は青年會館に寝泊されてゐた。

明治四十一年三月吉田さんの卒業の喜びはヴォーリスさん免職の悲報と變つた。即ち氏は縣民の反對に依り解雇されたのだつた。それからの氏は月三圓五十錢の食料で吉田さんと苦を共にされた。

氏が産中に奉職されたのは此時分かも知れないが確かな事は判然せぬ。

其後生活の糧を得る爲、建築設計の仕事を始められたが、之ぞ今日のヴォーリス建築事務所の始めて、今では大阪大丸を始め大小の建物の設計を手がけ、關西に雄飛してゐる。

其後其收入の一部を以て大津と米原に傳道所を設け、アメリカ人をして傳道に従事させたりされた。

明治四十三年正月から約一ヶ年歸國されて後、吉田さん等とヴォーリス合名會社を起された。これが今の近江セーブルズ會社の前身といふべく、資本金は僅に三千六百圓だつたさうだ。

有名な「メンソレータム」がこゝから賣り出されるやうになつたのは大正三年以後らしいが、現在に於てはメンソレータムは建築設計と共に此の理想郷事業の重要な財源となつてゐる。氏は其後満喜子夫人と結婚された。

現在縣下湖畔には基督教會館六ヶ所、定期集會開催地十九ヶ所(日曜學校等)あり、八幡には近江療養院、溥友幼稚園、近江勤勞女學校、教育會館を經營してゐるが、此等は利益を度外視して居り、其費用は全部近江セーブルズ會社と建築事務所の収益をあてゝゐる。會社は藥品部、雜貨部、直輸部に分け、藥品部はメンソレータムの製造販賣をなし、百人近くの男女工を使つてゐる。雜貨部は建築材料、家具、裝飾品、香料等を輸入販賣し、直輸部は日支及朝鮮の品物を西洋へ輸出してゐる。

る。

しかして、此等の經營は、近江基督教慈善教化財團之に當り、ミッションとしては教務部、通信傳道部、圖書部等の部門を分けてゐる。

近江サナトリウムは其設備の完全なる點食物の最もよく吟味せられ居る點、位置良好、通風採光温濕度等總てに遺憾なく、日本一の稱ある所以で、日々參觀者が絶えない。

中でも最も力強きは宗教的、即ち精神上的慰安を病客は求め得られる事で、牧師が一人／＼に色々語り聞かせて呉れる。

廿八年前近江の避地に蒔かれた一粒の麥は今や上記の如く、湖畔一帯の地に廣大な精神界の麥畑を生み、衰々として實れるあたり穗の美しきが如く實に秀麗なる風教の理想郷を其處に生み出し、それを中心に益々その擴大に努力してゐる。當今我が八幡に於てヴォーリスさん程尊敬されてゐる人はない。町民敬慕の的である。併し此處に至るまでの、隠忍自重たるやどんなにか、大きかつたらう。白刃のその頭上にかんとした事もあつた。バイブルクラスの生徒が暗夜に川へ投ぜられた事もあつた。昔氣質で凝り固つてゐる八幡

人へ基督教の否善事業に對する觀念を植えつけるのだから並大抵の努力ではなかつたらう。無抵抗主義、努力主義の勝利である。

近江理想郷は社會主義者や共產主義者に依つて建設されたものでもなく、又博愛家の遺業仕事でもない。たゞ宗教的精神に燃える數人の人々の汗と血とで築き上げられた理想社會である。波瀾重疊たる浮世の苦勞を重ねながら、その都度試練の難關に打克つて神より與へられたる好機會と智慧とによつて生み出した所の累積的の事業と施設である。

あまり長くなるから近江ミッションの記事はこゝらでやめやう。右はミッション發行の「湖畔の聲」より摘録したもので、彦中の先生だつたヴォーリス氏の奮闘録である。



劍道部部報

劍道部員

| | |
|----|------------|
| 五年 | 平居龍太郎 (初段) |
| 同 | 大原一夫 (初段) |
| 同 | 西村久雄 |
| 四年 | 細野徳太郎 |
| 同 | 北野賢三 |
| 同 | 居長賢三 |
| 同 | 山出光一 |
| 三年 | 橋本良雄 |
| 同 | 中島午郎 一年 齋藤 |
| 同 | 安藤龍一 同 坂詰 |
| 同 | 島本八郎 同 古澤 |
| 同 | 望月實 同 成宮 |
| 二年 | 石田 同 磯島 |

部報

| | | | |
|---|----|---|----|
| 同 | 津田 | 同 | 谷澤 |
| 同 | 安樂 | 同 | 西關 |
| 同 | 宮西 | 同 | 藤田 |
| 同 | | 同 | 樺村 |

昭和八年四月二十九日

八幡商業劍友會主催第五回 近府縣中等學校優勝劍道大會出場之記

山本、加藤兩初段を今春學窓より送りて以來吾等は早くも精銳を以て新チームを編成し、堂々本年度の王座を目指して躍進を開始した。嗚呼!! 快なる哉! 聞け、彼の道場の劍聲を、赤鬼の雄叫びを、やがて吾等の華々しき又記念す可き本年度初陣の時騰到來。時あたかも四月二十九日の天長の佳節、選士の肩

宇には必勝の氣が溢れ、一路八商道場へ。午前九時試合開始。尙當日の参加校は京都、滋賀聯合にて十六校、嗚呼戦を告ぐる鐘が響く戦はん、若人よ。第一回戦の敵は京都同志社中と決定。左に其の戦績を記す。



らる。次將北野立ち、矢庭に猛烈な攻撃を開始せり。彼の飛び込む面、胴は心地快き迄に平谷を掴まし遂に面と籠手を斬つて彼に名を擧げしめず、敵次將天野復仇の形相物凄く、其の體の小なると輕きとを利して盛んに籠手を打ち来る。北野疲勞を見せ、一時優勢なりしも戰長時に渡るにつれ遂に屈す。

中堅細野、さつと引くや體を落してぢり／＼敵に肉迫す。細野終始壓倒して遂に彼に涙を吞ましむ。早瀬出づるや、手下縮つて確實に斬り込まれ、何なく勝を擧ぐ。敵副將佐野此を覺つて刀を斜右に掃へ、一舉細野の先手を打ち込んで勝を奪はんとせしが、矢張り戦は細野に一日の長あり、油断なく飛び退つて輕く出籠手を斬り、進んでお胴へ一本！三名の敵を倒したる彼細野、次第に腕に牙えを見せ調子頗る良好、呼吸を調へて再び敵御大前田に挑戦す。前田悠然と立上り、悠々迫り来る狀何ぞ其れ壯なる。細野屈せず此處を先途と秘術を凝して戦へども……細野破るを見、吾れ直ちに敵將と刀を合す。吾れ先づ敵の機先を制せしも、不覺にも輕き籠手二本をとられて取る。

敵將前田流石に疲勞にたえず、急速な平居の

延び面二本を斬られて涙を吞む。嗚呼吾れ勝てり、快なる哉！

我等は以上の戦績にて、激烈な闘争裡に無事一回戦を突破した。豫想外の激戦！

やがて第二回戦は開始。敵は京洛の蒙京都師範だ。彼の野心満々たる意氣、堂々たる體軀はまさしく超中學級、殊に一回戦に於ては同郷の雄奮根工業を、優秀な業を持つ中堅に依りて撫で斬つた豪者、もとより油断は出来ない。しかし吾等は敵軍の主力が中堅に置かれてゐるのを察し、此への策戦をめぐらしつつ道場に入つた。やがて對陣。彼等の意氣早くも戦はずして相撃ち、此處に狂烈な京師對本校の白熱戰の火蓋は切られた。

左に第二回戦戦績を述ぶ。

◎第二回戦(京都師範——本校……本校勝)



つたのである。愈々餘す處四校、何れも精銳許り、遂に準備戰開始の鐘は高らかに響いた。敵は同郷の雄奮根工業、此れ亦強敵、確たる決意を胸に秘めたる我が彦中騎士は、母校の名譽の爲、意氣の爲、我等劍道部の誇の爲、水刀林立の滋賀師範の堅陣に突撃した。左に準備戰戦績を記す。

◎準備戰(滋賀師範——本校……本校勝)



先鋒居長第二回戦の時の勢を以て林寺に挑戦隙あらばと虎視眈々。敵も極めて慎重に備へて刀を合せず、双方共意氣の合つた持久戦。居長持久戦は不利と覺りしか、何を思ひけん氣合諸共敵の面へ。しかし敵此をよく防ぎ、突如刀を居長の左肩にかけて物凄く足拂ひをかければ、體小さき我が先鋒、不覺にも叩き倒さる。其の體力の堅なるを以てかける彼の足拂ひ、足がらみは實に物凄きものなり。

策戦の都合上居長を山出と交代せしめて、此れに當らしむ。

果然策戦は成功せり。

居長悠揚迫らず驟然として長嘯すれば敵此れに應酬す。しかし居長難なく此れを破る。敵次將小寺頭より居長に肉迫、遂に一本、一本、となり、其後善く此れと戦つたが惜敗。

北野此れに向ふも勢に乗じたる快漢小寺の爲に此れ亦敗れ、續く吾が中堅細野やちやく喰ひ止む。小寺の攻撃も細野の堅陣には喰ひ入るを得ず遂に彼が鋭刀の下に伏す。主力の焦點とも覺しき中堅中井さすがに此の意外なる強敵を、目前にひかへて、少しく狼狽の狀を現はすも、不敵極まる彼、微笑を浮べて一體するや鋭い氣合を發しつゝ連續的に細野の籠手を打つ。細野此れを防ぎ兼ねて退く。吾れ今こそ副將の重任を果さんと激闘、竹刀も折れよと長時彼と争つたが、嗚呼如何せん！吾れ亦もや取る。お、ゆるせ、吾が業の拙きを。平居は此の重任を一身に背負ひ、此處に意氣相撃つ決死的奮闘を演ぜんとす。

平居自重して撃たず、右に避け左に拂ひ、たと隙あらば飛び込まんものと此亦體を落して狙ふ。「籠手！籠手なり一本」突如平居の劍

居長倒されては起き、實に七轉八倒の憂目をなめながらも、尚闘志を奮ひ起して戦ひしが遂に面と胴を斬られて敗退。次將北野決然敵に復讐の豪力を加へんとせしが、亦もや敵林寺の物凄く足拂ひをかけられ、籠手二本を斬られて敗退。中堅細野立てど、林寺の烈しい足拂ひの攻撃に惱まされ敗退。お、危し敵は早我が先鋒、次將、中堅の三名を斬つて今や副將に迫らんとすなり。今救はずば我が翻業成らず。好敵到来！我が第一、第二回戦の怨を、暗らす時機到来！戦はん滋賀師範よ！我等が赤鬼の意氣を見よ！我れ固く心に必勝を期しつゝ、敵軍に突進。敵は三名を倒して意氣益々擧り、我れは復讐の念に燃え今や二球は只一個の熱丸となつて烈しく争ふ

しかし敵の足拂ひは愈々障力を發揮し、我れ亦其の苦杯をなむるの已むなきに至れり。矢張り早の彼の足拂ひ、我れを幾度道場の板上に倒せし事か。そして遂には背にしみる痛みの爲に、一時試合中止を請ひし事もありたり。しかし、しかし今は屈す可きにあらず、遂に先鋒林寺を斬つて體を報じ、續く中西を抜き面と出籠手で、中堅戸井を延び面と下り面に倒し、息もつがずに副將藤森に迫る。藤森

突は中井の籠手に延びて見事一本。と又もや嵐、中井とん／＼と素早く前進、左に刀をとると見るや、平居の籠手を攻むと見せかけ、急轉胴に變化し此れ亦一本を得、相方一本一本思はず手に汗する熱戦を演ず。突如敵に隙あり、彼鬘髪を容れず流星の如く飛び込んで籠手を制す。敵副將出づれど、調子良好、油の乗つた彼が健腕に抗す可くもあらず、電光一閃飛び来る劍尖を受け損じて伏す。敵御大足立俄に形勢急迫を告ぐるを知り、用意周到ハッタと吾が將を睨み、斜正眼に構へてする／＼攻め寄ると危し、敵將の劍先鋭く、平居の刀を割つて入り、續いて籠手へ。平居籠手をとられつゝ、も尚よく攻め、進んで彼の籠手へ、あ、亦もや一本一本！京師か？果た彦中か？

兩學舎の名譽は只此の一刀に在り。あゝ！又もや平居の劍先さつと延びて彼が籠手へ。あゝ！兩校の壯烈極まる決死的闘争此處に止む京師取る。強敵京師取る。吾等はひたすらに平居の奮闘に感謝あるのみ。

——X——X——X——

雖關京都師範への對戦を無事終へた我等は益々自信を高め、早目前に迫る優勝の榮冠を狙

我れの疲勞に乗じて烈しく攻撃すれど、此れ亦赤鬼の下に屈伏す。あゝ我れは今無我夢中て敵四名を斬れり。今一息、残るは大將中西一人、何程の事やあらんと慙々最後の決戦に入れり。

中西我れに胸を先取さるゝや、蒼白なる顔を引きつらせ、盛んに我れに攻撃す。あゝ、しかし我が疲勞慙々甚だしく、我れ此處に憤死す。

敵將中西も亦疲勞甚だしく、我が將に對すれども到底敵はず、平居一本を斬られて手負ひつゝも、勇敢に延びて我が軍の勝利。あゝ亦もや我れ勝てり。勢頭敵先鋒に我が軍惱まされ乍らもよく此れを交へて亦もや我が校の勝利。大勢敵軍優勢を突破し、堂々優勢戦へ駒を進む。愈々優勢戦!!我等にとつては歴史的なる此の一戦!我等は彦中の意氣の爲に、否滋賀縣の名譽を、只此の一團に賭して龍虎相搏つ一大決闘を茲に演ぜんとす。時しも早附近は暮色に包まれ、寂として聲なし。敵は洛西に名聲赫赫たる猛者京都三中!昨年自己が獲得したる優勝旗を亦もや奪はんと、勢頭に本縣の雄栗田農を倒し、準優勝に於ては新進を誇る神崎商を斬つた豪の者、好き敵い

の堅陣に肉迫。しかし平居何故か打たず、只敵刀の亂撃を危く避けつ拂ひつしあるのみ。あゝおそらく彼も暗さの爲、敵刀を識別するを得ざるならん。相正眼にとりつゝ、戸田を、刺さんとせしが、遂に敵の鏡刀に倒さる。嗚呼!嗚呼!我が軍敗れぬ。遂に遂に京三中に學冠を奪はれぬ。

我等は遂に敗れた。朝來より大激戦を續けし事幾度、しかも其の効報ひられず此處に壯途は覆へされてしまつた。我等は今此處に月並的な泣き事を云つて諸君への辯解の餘地を見出さない。勝敗は實に時の運、只我等は終始母校の名譽の爲、彦中赤鬼七百の者の意氣の爲大いに奮闘して來た事は認めて頂き度い。そして此の一戦に依て諸校に「彦中恐る可し」の感を抱かしたものは實に愉快極まりない。

明治神宮縣下豫選

去る四月二十九日、八商劍友會主催近府縣中等劍道大會に於て、優勝戦に、武運拙なく京阪の雄京都三中に涙を飲んだ我等は、此度こそはと、捲土重來の勢を以て一路大津へ!大津へ!あゝ腕は鳴る。戦機は熟せり。敵は

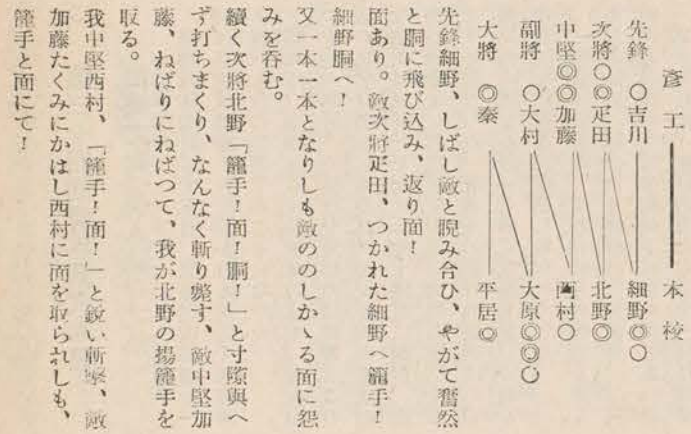
ぞ戦はん。戦機熟す!あゝ壯烈極まる優勝戦の幕は先づ幕たる審判の宣戦に切られぬ。覇を指す二校、本校か?京三中か?滋賀か京都か?左に優勝戦々績を記す。



兩雄對陣。兩軍の先鋒、味方の國志を鼓舞す可く互ひに攻勢に出づれど、敵先鋒背の急追撃を蒙り、山出善戦せしも此處に憤死。次將北野はつと立上るや得意の操劍を以て亂撃又亂撃敵に寸隙も與へず、副、籠手に飛びかかれれば、背危険を覺つて退らんとするや間髪を容れず敵の面に飛び先づ見事な一本を先取して意氣衝天。街斷然燃せられ亦もや北野得意の延び面を食つて驚る。敵次將小谷小兵なれども素早い籠手に優秀なる業を持ち、悠々白粉を塵かせて迫り來る狀、流石は洛西

と見れば多年の怨敵彦根工業。今年こそ、會稽の恥を雪がんと、互に勵まし勵まして道場に乗り込む。

第一回戦

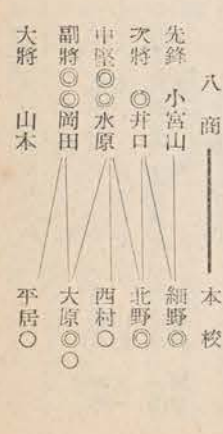


しかし元より我等が強き赤鬼の鏡刀には抗す可くもあらず、中堅松田に刀を讓つて退く。松田頑強なる體軀を以て終始細野を壓し、籠手を斬る。細野疲れしか?頭張れ!!!最後の決戦なるぞ!!!しかし敵中堅松田は一回、二回準優勝の各戦闘に敵を三名、四名續け斬つた豪の者、遂に彼の足下に伏す。續く我れ、何の京洛の驕兒何者ぞとばかりに勢頭大膽な大業面へ、「面あり!」道場内の薄明るい電燈が鈍く敵の面金に反射して頗る視界困難なれども善く攻め、一度は敵に胸を斬られつゝも「ピン!」鋭いお胸の斬撃の響が高らかに勝利を報せり。

副將戸田此れ亦小兵なれども彼が三尺九寸の長劍を持つて、颯と延び來る面、胸は實に鋭く、最初破れた栗田農も此の鋭劍にかけられて敗北したるものなり。遂に敵の長刀を胸に加へられ、籠手に加へられ無惨にも落花。我れ敗るを見るや戸田勇を奮つて續く大將平居

我副將大原、此れではならじと、「面!籠手!胸!」籠手!面!と、千變萬化秘術を盡してわたり合ひ、なんなく胸二本!。續く敵副將大村長身を利して伸び來るを、大原たくみに拂ひかはし又もや返り面!返り胸!敵御大泰、さすが一軍の將たるもの悠々迫らず、近よる大原を足拂はんとす、大原疲勞の後なれば、長時間善戦せしかども敵の裂き入る籠手を防ぎ兼ねて退く。よく戦ひしぞ大原我かならず仇打たんと口には言はねど心に期したる御大平居悠々迫らず敵と睨み合ふ事しばし、裂破の氣合平居の口より出づると見るやビニーと手練の一刀は敵の胸へ!胸あり。二本目、亦も胸に飛び込み敵に近づいたと見るや飛鳥の如く離れて平居の一刀は敵の面へ見事!面あり!凱歌は終に我軍に揚つた。宿敵彦工を斃した、會稽の恥は雪がれた。

第二回戦



我先鋒今度は最初より攻撃に出て、器用な敵をして手も出さしめず終になんなく面と籠手にて、敵次將井口、なか／＼すばやく、揚籠手を取る。我次將北野、亦も、亂撃く／＼敵の下に屈伏させんものと、火花を散らして、戦へども、すぐれし敵に、やむなく勝をゆづる我中堅西村、善戦せしかど如何せん。

副將大原、形相もの凄く、敵中堅に肉迫し、熟戦、撃戦幾度か手に汗揮らせ咽に唾させ、丁々發止、丁發止と渡り合ふ事數十合終に彼が豪刀に、續く敵副將も一舉に斃さんとせしかど疲勞堪へ難く、遂に退く。續く御大平居彼が長身を以て飛龍の如く面へ！面あり、と敵の袈衣入る籠手を斬られて一本一本、己れ何程の事かと奮戦せしかど敵は千軍萬馬を往來せし豪の者、心はやれど、ましてはしと睨み合ふ「エイ」と平居口に氣合が、又も面と見る間に、敵の打ち揚げし籠手に怨を飲むあゝ萬事休す。

我等は敗れた。こんなに期待して来た此の試合に！我等の練習がまだ足りないんだ、そりだ！これからは一層猛練習をやらう。そして此の試合で悟つた事を實行しよう。

長も敗れたりとはいへ決して恥辱的な戦はしなかつた。

北野、細野も意氣充ち満ちて彼等の剣光は常に敵を抑へ攻撃に攻撃遂に勝を制したのである。

西村、大原は素より勝算我にあつたが、而も彼等の老巧な又は敵をして一寸の抵抗さへ與へなかつた。

戦終り、選士の顔は熱血に今猶赤く、六百健兒の熱聲を想起して、更に明日の戦を待つた。

大日本武徳會第三十四回 全國青年大演武會出場之記(団体試合)

殊更なる本年度の殺人的猛暑も何のその、次第に吾等待望の第三十四回全國青年演武會迫るにつれ更に熱を加へ技を上げ今や吾等が意氣は其の極點に達した。思へば一年の昔、當大會に於て第一回戦にもろくも關東の俊鋭靜岡商に涙を呑んで、悄然故山に歸らなければならなかつたあの時、餘りにも恵まれなかつた昨年の戦を思ふ時、自ら復讐の念が眞夏の太陽の如く炎々として燃え盛るのを覺えるの

あゝ校友會諸子よ、恕せ！此の敗戦を！

第三十四回青年演武大會 出場之記(個人試合之部)

昭和八年七月二十五日 我等剣道部選士一同は京都武徳殿に於て開かれる第三十四回青年演武大會に出場することになつた。

晒れば、炎熱燻くが如き夏の日も、佐和山に夕陽の熟れる頃汗を流した猛練習はこの晴の日を目標としてゐた。而も愛校の念盛んな選士は猛練習を物ともせず練習に練習、相番ひ相勵まし我等選中の爲に倒れて後已まんとする勢だつた。我選士の犠牲的精神は六百健兒の熱誠なる態度と共に我選士をして敢て超人的な猛練習をなさしめたのだつた。

「唯選中の爲に」と粉骨碎身の努力も涙ぐましき程に、凜然たる掛懸は天を衝き、三尺の竹刀は相撃ちて金龜城下に響くのであつた二十五日曉、鋭氣勃々たる選士一同は捲土重來胸に必勝を誓ひつゝ、懐しの彥根を出發した。

武徳殿には早戦氣満々として、全國より馳せ参じた選士は數限りなし。戦開かれて以來我選士の腕益々冴え、氣愈々擧る。

再び夏は巡り來て捲土重來の機近し。さうだ吾々は勝たねばならない。よしきつと勝つてやるんだ。吾々は四年生諸選士の腕に信頼する。鼻意氣に信頼する。かくて全國の若き血に燃ゆる若人が一校の名譽を永刀に賭して相搏つ決戦地山色水光の佳都へ。

當日個人試合後直ちに宿舎に入り、先づ第一夜を送る。明くれば廿六日、遂に來た！吾等が雪辱の日は來た！敵は奈良の古豪五條中だ。かくて晝なほ暗い殿堂には紅顔の若劍士の壯烈なる第一回戦の序幕が切つて落された。はじかれるばかりの若人の雄叫びは共に彼我の名譽の爲に烈しく相搏つ。來れ五條中！戦はん哉赤鬼の眞價を發揮すべき時は來た。嗚呼心地よや先づ赤鬼が第一陣の血祭にあげん。左に五條中對本校の決闘を記す。

——X——X——X——

第一回戦西の方

(奈良五條中——本校)……本校勝
○主要備考 1、一本勝負

2、審判は大日本武徳會本部規定に依る。

試合開始十時。兩校對陣。丁度其の時長くも

左に其の戦績を見られよ。

- 二級之部
 - (1) 兵庫小野中 校 下○藤本 輝男
 - (2) 兵庫伊丹中(先鋒)コテ○近江 賢藏
- 一級之部
 - (3) 岡山笠岡商 校 下○北野 道夫
 - (4) 兵庫尼崎中 校 メン○細野徳太郎

- 初段之部
 - (5) 愛媛松山商(大將) 校 メン○西村 久雄
 - (6) 廣島廣陵中(大將) 校 下○大原 一夫
 - (7) 鳥根三刀屋中大將コテ○兒玉 平居龍太郎
- (1) 初陣にして腕定まらず日頃の手並が充分に發揮せられなかつたのを恨む而已
(2) 相手の腰落つかず平居態々と。迫り敵を惱ますこと十數合然れども我に利あらず遂にアゲゲテにて涙……
新しき戦績を見るに七選士中三選士倒る、必ずしも満足な結果ではない。併し平居の負は偶然にして眞の敗戦に非ず、意氣に於て彼は斷然相手を呑んでゐたのである。山出も居

梨本宮守正王殿下には諸君の奉迎を受けさせられ武徳殿に御台臨吾等に優渥なる令旨を賜はりたり。光榮！吾等は今や殿下の御前に於て勝敗を争はんとするなり。

第一回戦

奈良五條中——本校

- 先鋒 坂本 ○細野
- 次將 米田 ○北野
- 中堅 西川 ○大原
- 副將 中村 ○平居
- 大將 弓場 ○西村

先鋒細野、ぐつと押し敵刀を割つて電光石火籠手へ。見事な籠手！先づ吾が軍一點先取。次將北野此れに勇を得、得意の亂撃を開始すれば米田之れには手足も出す片隅に壓せられ延び面を斬られて敗退す。亦もや吾が軍得點計二點をとりて意氣愈々冲天。

後一點とれば吾が軍の勝利！吾れ立つや颯と引き敵陣を狙ふに、敵中堅西川更に攻勢の氣配無し。先づ吾れ先攻に出て下手に倚ると見るや素早く返り胴を切る。

嗚呼勝てり！吾が軍三點の先取に依り此處に勝敗決定す。副將平居樂な氣持で善く攻めたが敵の籠手意外にも鋭く遂に涙を呑む。大將

西村初陣なれどもさすがは五年、堂々と構へて餘裕を見す。敵將弓場何のとはかりにジリ／＼二三歩前進、さつと西村の籠手に延び来るを、彼よく避けて一步後退、と見るまに鋭い抜き面を一本「面あり」彼得意の抜き面は見る眼も鮮やかに。

先づ第一回戦を以上の物凄い戦績で突破す。四對一！此の壓倒的戦績を見よ！

第二回戦は山陽の古武者廣島二中。何の恐るるに足らじ、此の意氣を以て一氣に打破らんと時の到るを待てり。左に第二回戦々績を記さん。

—×—×—×—

第二回戦(廣島二中——本校)……本校勝

第二回戦

廣島二中——本校
先鋒 増原○——細野
中堅 入江——北野
大將 吉井——大原
高田——平居
日高——西村

山陽健兒強きか？ 果た赤鬼の健腕か？ 我等が此の燃ゆるが如きファイティングスピリットを見よ！ 赤鬼の雄叫びを聴け！

先鋒細野ぐんぐん出て敵の面に飛んだが業優れし敵先鋒の爲抜き面を切られて惜敗、北野決然として立つや今度は慎重に構へてみたが敵退るを見るや間髪を容れず流星の如く面へ延ぶ。「面あり」亦も彼得意の見事な延び面。兩軍一對一

我れ憤然と立ち劈頭より吉井に猛襲、決戦十數合の後敵刀わが籠手に延び来るをさつと右に抜いて大聲一番其のまゝ敵の面を切る。われ日頃の練習は報いられて此處に凱歌。副將平居一回戦の雪辱を爲さんと、意氣漲く腰を落して敵將に肉迫すれば、敵は刀を斜右に構へて守備固く、更に斬撃の機会なし。されど平居の操劍増々牙えを見せ、凌間より一擧飛ひ込み嗣。「嗣あり！」審判聲あり、實に鮮やかなる飛び込み嗣、敵啞然として退く。

我が軍三點亦もや凱歌は高らかに擧る。大將西村微笑しつゝ敵將と刀を組み之も最初より猛襲又猛襲何なく抜き面を以て、敵に名を擧げしめず。彼の抜き面増々其の牙えを見す。以上二回の決戦や、共に四對一の壓倒的勝利實に我が軍の意氣は完全に敵を呑み、戦は戦はずして勝つのは概ありき。殊に先鋒、次將を承はる四年生劍士の意氣は實に賞讃に値す。

かくて我等は来る可き第三回戦への英氣を養ふ可く道々當日の戦況を語りつゝ宿に入れりあゝ！明日の戦の上に幸あれ。選士よ、安らかに眠れ！

明ければ廿七日、早朝武徳殿に乗込む。四分の一に減じた、戦客は各處に廣い空地を作り居れり。第三回戦は大垣一中と決定。左に其の戦績を記さん。

—×—×—×—

第三回戦(大垣一中——本校)……本校勝

第三回戦

大垣一中——本校
先鋒 杉崎——細野
中堅 中島○——北野
大將 喜多——大原
細川——平居
岩佐——西村

大垣一中何者ぞ!! 兩校の先鋒必死となつて争へども、細野返り嗣を切つて、敵に名を擧げしめず。北野勢こんで打込めども……われ立つや素早く延び面へ一本！ あゝ心地快し！ 副將平居先づ細川と鋤を接し、素早く飛び下るよと見るまに續いて敵の籠手へ、突進。「籠手！ 籠手！ 籠手なり一本！」彼の

氣合鋭く、亦もやわが軍三點先取にて凱歌は高らかに。敵悄然とうなだれ顔も擧げ得ず。大將西村立つや亦もや岩佐の體に倚り、ガツチと鋤を合し、パツと退るや見事な籠手を切る。

手下締つて、鋼尖は鋭く返り籠手を打てり。噫！ 増々赤鬼が亂舞する。心地快や此の勝利！ 王座は目前に迫る。

—×—×—×—

第四回戦(兵庫赤穂中——本校)……本校勝

最早居残るもの僅か、何れも遅り抜き強剛ばかりである。第四回戦は兵庫の覇者赤穂中!! まさしく強剛だ。初段四名二段一名の堅陣を有する彼等こそ我等が好敵手だ。今こそ必死の決戦を演ぜんとするのだ。左に我等が遂に、壯途空しく最後の花と散つた。壯烈極まる第四回戦々績を述べる。

—×—×—×—

第四回戦(兵庫赤穂中——本校)……本校勝

兵庫赤穂中——本校
先鋒 新船——細野
中堅 小寺——北野
大將 小河○——大原
新田○——平居

大將 江見○——西村

兵庫赤穂中は京阪、山陽を壓する強剛、殊に各處の試合には、多岐優勝せる強剛なり。されどわれ等ひるまず。我等の背後には彦中七百の健兒の魂あり、意氣あり、息のつよく限り狂ひに狂つて奮闘せん。いざ來れ！ 我等が水刀受けに見よ！

先鋒細野、身に第一陣を承はる重任を只此の一刀に託して、隙あらば刺さんと、虎視眈々されど敵は要領よく、刀を身にビタツとつけながら、ピン／＼追籠手の猛襲。「籠手、籠手！ 籠手！」と續けざまに打ち来るを細野パツとはづして面へ一本！ 噫勝てり。わが軍一點先取、北野、此處を先途と、只亂撃又亂撃、勇敢に攻め來た正義の刃は確實に。亦もや彼得意の延び面ピン／＼と敵の頭上に落つ「面あり！」噫二點先取。見よ！ 四年生選士の此の意氣を。われ一擧に敵を粉砕せんものと、死力を盡して、敵陣に突撃。噫されどされど無念なり、如何せし、手下締らず次第次第に疲勞を覺え來るなり。敵も疲勞し初め幾度か好機を迎へながらも、體延びず長時間奮闘せしが遂に敵刀に倒る。無念!!! われ勝たざりし故に、是の如き惜敗をなせしにはあ

らずや。諸君ゆるせ、只諸君の御寛恕を乞ふのみ。平居我が仇を報いんと、千變萬化秘術を盡して戦へども、彼の手下定まらず遂に新田の切り来る籠手を受け損じて茲に嘔死。兩軍二對二の大接戦。

我等は只西村に期待あるのみ。大將西村の奮戦を待望するの己むなきに至れり。しかしながら敵將江見は二段の猛者にして體大きく堂々我が將に挑戦す。西村最初より攻勢、攻勢に出たが敵將巧みに拂ひ、なか／＼打たしめず。

彦中か？ 赤穂か？ 兩將の心や眞に察するに餘りあり。

突如、敵將眞向面に振りかぶつて、西村に切り来るを、西村軽く拂つて、亦もや氣味悪い組み合ひとなれり。しかし次第に西村疲れを見せ、遂に敵將の面撃を受けて雄々しく、散り果てぬ。

西村奮闘せしもその効を奏せず、此處に勝利を、赤穂に譲るとは、悲慘なりし此の最後！ おゝゆるせ、そして共に此の惜敗を泣け！ 群雄を退けて此の第四回戦に駒を進め、遂に是くも悲慘なる最後を遂げた。

我等が無念を察せよ！

我等は以上の戦績を以て、此の檜舞臺を去らねばならなかつた。是く迄に健闘に健闘を續けて来たが、第四回戦に我等五年生の武運拙きとは云へ遂に赤穂に破るとは……併し本年度の大會に於ける我等の健闘は、意氣は實に素晴らしいものであつた。彦中赤鬼魂の眞價が立派に發揚されて来たものと信する。そして幾分なりとも諸兄の御期待に沿ふ事が出来たのは我等が大いに喜びとする所である

大阪學生剣道聯盟主催 第六回全國中等學校優勝 剣道大會出場之記

七月二十七日 京都武徳殿大會終了後亦もや第二次の遠征に上る。同日午後三條を發し、一路輝都へ、大阪着後、直ちに大阪武徳會支部側の宿舎に入る。明ければ二十八日早朝より支部に乘込む。しかし豫期だにしなかつた強敵山陰代表大社中と組み遂に敗戦の將とならねばならなかつた。オール有段者、殊に二名の二段を有する。彼の堅城には喰ひ込み兼ねた。しかし各人ベストを盡して戦ひ、たとひ敗ると云へども其の奮闘見る可きものと

あつた。左に戦績を略記する。

- 第一回戦 本校不戦勝
- 第二回戦 (和歌山中——本校)……本校不戦勝
- 第三回戦 (鳥根大社中(山陰代表)——本校)……本校負
- 當日奮闘せし選手左の如し。
- 先鋒 北野 寛 補欠 山出 光一
- 次將 細野徳太郎 同 居長 賢三
- 中堅 西村 久雄
- 副將 大原 一夫
- 大將 平居龍太郎

第十回彦根高等商業學校 主催近府縣中等學校優勝 剣道大會出場之記

京都、大阪方面の遠征を終へ間もなく、土用稽古を開始した我等剣道部々員は秋やうやく迫るや次第に健腕に油をのせ、来る可き大會の日を待つた。あゝしかし遂に大會當日は來た第二學期劈頭の戦だ！今こそ優勝せんと各々決意し、希望と意氣とに輝く我等が顔面は折から古城の端に出づる朝日に映え渡る。一回戦は幸か不幸か不戦勝となる。二回戦は岐阜中と刀を交へる事となつた。相手は岐阜

の猛者岐阜中、われは赤鬼武者の熱血を受けた快傑、共に相譲らざるものがある。しかし當日に於ける我等のコンデিশョン頗る悪く、平常の業も如何せし思ふ存分發揮出来ず、此處に奮戦の効なく敗北の憂目を見るに至つた意外な敗北！我等は涙さへなく、亦もや刀を納めねばならなかつた。諸君！ゆるして呉れ、すまない！是く迄熱烈なる諸君の御後援を忝なくし乍ら……。

嗚呼何といふ不運な我等か！優勝の能力は十分に持つてゐ乍ら遂に其の好機を逸した事をかへすがへすも残念である。

此の敗北の傷手を受けつゝも、此れを雪ぐ可く、来る可き最後の戦、縣下大會に錦を飾る可く、亦もや常に優る猛練習を初めた。尙當日の戦績を左に記してかく。

- ◎第一回戦 本校不戦勝
- ◎第二回戦(岐阜中——本校)……本校負
- ◎第三回戦(岐阜中——本校)……本校負
- 先鋒◎◎堤
- ◎◎榎木
- ◎◎坂田
- ◎◎羽鳥
- ◎◎平居◎
- ◎◎西村
- ◎◎大原◎◎
- ◎◎細野
- ◎◎平居◎

我等は是くの如き戦績を以て敗れた。只諸君の御寛恕を待つのみ。尙試合當日多數の諸兄の御援を忝ふせし事は、厚く感謝す。

三高主催全國中等學校優勝 大會出場之記

武道部長として慈父の如く我等を指導せられし笠井先生を今津中學に送るの一大痛事に遭遇し。一時はなす所を知らざる有様であつたが、かくてはならじと土用稽古に引つゞき新學期早々より大いに練習を積み、十月一日、内に大なる自信を持ち背後に彦中六百の健兒の與望を擔つて京洛の地へ遠征の途についたのであつた。數萬の財を投じたりと聞く大道場に於て會長の開會の辭に戰の幕は切つて落された。此の日や天運かに、我等が意氣亦高し。

- 第一回戦 不戦勝
- 第二回戦
- 本校 京都二中
- 先鋒 〇細野 森田
- 全 〇世古田
- 次將 〇北野 全

- 〇全 齊田
- 〇全 平井
- 〇辻
- 中堅 西村 〇全
- 副將 大原 〇全
- 大將 平居 〇全

先鋒細野立上るや敵の虚につけ込み胸に猛進。次いで籠手を取り先づ敵陣を亂す。次いで敵次將の胸を取りしが籠手面を取られ退く。次將北野は此の日コンデিশョン最上にして我等がその奮闘を期待する所なりしが案にたがはず初づ次將を面、籠手に籠手に倒し、次いで現はれたる敵中堅を美事飛込面二本に切る。敵嘩然として退く續いて出でたる副將も今は破竹の勢の北野には施す術もなく退く。今や北野の獨壇場。次ぐ大將も風前の燈と見えたりしが北野疲れて惜しや敵の變刃に退く七月武徳殿に大奮闘せし中堅西村は元氣一ぱいに戦ひしが調子出ず涙を呑む。副將大原は自信に満ちて戦ひしが調子悪かりしか遂に敗る。大將平居味方の敗戦に奮然として出づ。もの如何なるすきを見出しけん。わが面へ飛込み來り一本一本となる。後の一本が我等が

- 本校 京都師範
- 先鋒 〇細野 飯田
- 中堅 北野 〇全
- 副將 〇大原 〇全
- 〇全 小寺
- 大將 平井 〇全
- 〇全 足立

運命にかゝはるのだ。併し見よ！！我等が御大の悠然たる姿を！！少しの動搖の色も見せず敵に對し亦もや籠手に突進！！遂に凱歌を揚ぐ

第三回戦

第三回戦は京師だとの報せに我等の面上にさつと決心の色が見えた。優勝候補隨一同志の對戦だ。よし！！此の一戦に勝てば残る燕雀は云ふに足らず。榮冠は我等のものだ。併も敵は陽春八商に於て我等が軍門に降りしことあり。嚴かに「勝負三本」の聲は道場に響きわたつた。先鋒細野は飛込面と返し籠手に敵を切る。次いで現はれたるは敵の副將中井長身肥軀を利用して攻め來る。細野出籠手に敵を打ちしも續く二本を籠手、胸に取られて退く

對二中戦に奮闘せし北野は長身の敵に見事飛込み面を取りしが疲れて遂に敵に名を成さしむ。續いて現はれたる我中堅西村は二回戦の辱を雪がんものと大いに猛闘せしめや、あせれるか接戦の未敗る。これに次ぐ輕妙軍の如き副將大原は數合の末簡單に次將を切り、續く中堅も我が鋭鋒に敵しがたく退き、副將と對す。彼も我が手練の刃にはかなはずと見えたりしが能く攻め遂に勝ち我大將平居と見ゆ平居先づ籠手を取りしも敵亦籠手を取り一本一本となる。一進一退滿場を唸らすの大試合を演ぜしも遂に取る!! 噫!! 我等遂に雄圖空しく勝を京師に譲るとは。今春の仇を報いられんとは。我等は此の敗戦に鑑みて一層の努力をなす事を固く誓ひ、捲土重來を期して京洛の地を去つたのであつた。因に云ふ。京師は斷然他校を壓し當大會に優勝せり。最後に當日内田先生公用の爲代理として引率御監督下されし村山先生に厚く感謝す。

第十八回縣下中等學校 劍道大會出場之記

八幡商業主催劍道大會に、亦京都武德殿に出場して、惜しくも九叔の功を一貫に缺きて

遂に涙となつた我劍道部は、殘暑尙嚴しき八月の末より銳意専心練習に練習を重ねて雪辱の日に備へた。

十月二十九日! 遂に決すべき日が来た。晩秋の風早膚に寒かつたが、空はよく晴てゐた(此日大會は我ヶ校道場にて開かれた。)

潮東の地に馳せて縣下に覇を稱へようとする諸校を迎へて猶悠々として迫らず、月桂冠の獲得を誓ふ選手の意氣は盛だつた。夕陽金龜城を蔽ひ、鐘聲肅然として響き渡るまで、鍛えに鍛えた腕は鳴つて、寄る者は皆一刀の許に斬り伏せようとする勢だ。

勝敗は時の運といふ、だが今亦長蛇を逸するならば、敗殘の涙に濡れて、地に埋れて行く許りである。六百健兒の熱誠を思ひ、又脊水の陣を思つて、我等は必勝を誓つた。次に戦績を記す。(點數に依つて順位が定めらる。)

- 第一回戦 本校 4-1 水口中學
先鋒 ○細野德太郎 望月 政雄
次將 ○西村 久雄 中西 新二
中堅 北野 寛 ○藤崎 茂美
副將 ○大原 一夫 藤橋 憲司
大將 ○平居龍太郎 木下 邦夫

先鋒細野へ堅く、敵を惱ます。敵に籠手を許すのみで、遂に勝を制す。續く西村機先を制し、籠手を斬り愈々壓して遂に面に延びて敵をして煙然たらしめた。中堅北野克く戦ひて決戦十數合にして涙! 副將大原、流石に鋭く攻め立て、電光石火敵意氣なく降る。

大將平居悠々として長嘯すれば敵之に應酬するを一刀の下に切る。鮮であつた。

- 第二回戦 本校 3-2 大津商業
細野德太郎 ○藤谷 健二
○西村 久雄 山本 貞一
北野 寛 ○近藤 登
○大原 一夫 平井 文吉
○平居龍太郎 芝原 秀夫

先鋒細野一刀の許に斬り伏せんとしたが、敵もさる者、相進み相退き白兵戦を演じ、一本を取つたが勝を讓る。

細野の仇を報せんとする西村敵に一分の餘裕をも與へず。次ぐ中堅北野第一回戦の辱を雪がんと猛烈に攻めたが、我に利あらず再び涙となる。副將大原益々氣擧り、獨特の操劍にて敵を破る。

大將平居自重して攻めず。敵將芝原も亦豪者と聞く、兩雄遂に決して刃を交す。平居始め一本を許したが、克く戦ひ、凱歌我に揚る

- 第三回戦 本校 3-2 比叡中學
細野德太郎 ○新宮 光正
西村 久雄 ○靜谷 行謙
○北野 寛 有本 光宗
○大原 一夫 大獄 順公
○平居龍太郎 佐井記俊照

戰期熟す。比叡中何者ぞ! 先鋒細野一息に倒さうと、立つや否や攻勢に出た。だが案外敵の構へ堅く籠手、胸を切られて退く。次將西村又もや冒險的に攻めたが涙……

嗚呼二戰士倒る! 是に優勝の光輝らぐ。北野敢然として立ち積極的に攻め面二本取る。副將大原豹の如くに胸に入る。鮮なり。審判「胴!」と聲あり。二本目敵の應酬猛烈だつた、だが大原颯と退き面を切る。

平居敵を含み應酬を俟つ。果して應酬して來た。然し平居の刃の前に倒れない者はないのだ。エイ! と掛聲をかけると、共に面を。面だ! 面あり! 二本目! 聲寂として響く。敵用心深く構へる。平居こゝぞとばかりつか／＼と進みて敵の胸へ! 遂に決した。

然し、然し! 何たる皮肉ぞ! 此時強豪八幡商業の零敗の爲、栗太農學の優勝と確定す。

嗚呼! 亦敗殘の涙! 涙に咽びつゝ、第四回戦に出る。

- 第四回戦 本校 2-3 長濱農學
細野德太郎 ○川西 甚平
西村 久雄 ○島田 俊河
○北野 寛 紫田茂一郎
○大原 一夫 西川 辰夫
平居龍太郎 ○中川 春一

我軍にファイティエクスピリット乏しく遂に敵の軍門に降る。噫! 幕は閉ぢられた。而も中原副未だ成らずして。許せ。許せ六百の健兒よ! 涙に咽びつゝ、健兒諸兄に深く詫ふ。

然し我に武運のなかつた許りだ。覇者たるの實力を有しながら、而も月桂の冠を讓るとは……

「敗軍の將兵を誅せず。」とかや、然し聞け六百の健兒よ。敗將の悲壯なる叫びを! 我等は決して負けたのではない。否勝つた意氣と精神とに於て完全に他を風塵した。外面的に敗れたとはいへ。一中としての内

實は充分に揚げられたのだ。彼等の心底に深く彦中スピリットを刻み、彦中の眞髓を捕えつけたのである。

最後に乞ふ。親愛なる健兒諸君よ! 今後に於て益々熱愛せられんことを。更に聞け! 劍道部後輩諸君よ。諸君は前途多岐である。

奮へ! 起て! 而して我が彦中の爲に棄け! 月桂樹の下に彦中劍道部を謳歌する時を。

附記——本大會に我劍道部の寵兒大原一夫君は全勝者として個人賞に入賞した事は彦中の名譽の爲に大いに祝すべきことだ。

劍道部後記

○あゝこゝに至ては終つた。吾れは入部以來嚴寒も酷暑も、ものともせず。ひたすら劍の道に努めて來た。吾が校の名譽の爲に! 吾が劍道部隆盛の爲に! 併しながら其の結んだ實はあまりにも貧弱であつた。勿論武運も拙なかつたが、吾等の努力がまだ／＼足りないのを今悟つた。

劍道部諸子よ! 吾彦中健兒よ! 眞に武士道を

體得して、國家の爲に成すあらんとするの士よ、こそつて吾が劍道部に来れ、而して愛する母校の名譽の爲に！ 吾が劍道部隆盛の爲に！ 盡されん事を切望して止まない。

(平居生)

○僕は今此の光輝ある彦中劍道部を去らんとしてゐる。しかし長き星霜を諸君と共に劍の眞髓を極めんものと努力して来た吾が身は、今此處を去るとも魂は常に吾が愛する劍道部の頭上にあるのだ。吾等は未熟乍らも、吾が校の名譽、彦中劍道部の意氣を双肩になつて各處に遠征し、夫々相當の戦績を納める事が出来た。殊に四年生諸君の素晴らしい腕の牙え、あゝ吾等は安心して去つて行く事が出来る。闘志旺盛なる彼等、あゝ吾等は此に期待を置いてゐるのだ。願はくば來年こそ優勝の榮冠を獲得し、以て彦中赤鬼健兒の意氣を天下に現はされん事を。頭張つて呉れ！勝つて呉れ！ 此が去り行く者の最後の願ひだ。「大原生」

+

+

+

柔道部部報

部員

| 五年 | 橋本 末藏 | 二年 | 島本 光尚 |
|----------|-------|----|-------|
| 島本 良三 | 依光 博 | | |
| 上田 敏夫 | 上田 源六 | | |
| 四年 西島 輝雄 | 的場 章 | | |
| 田中太一郎 | 山内 光三 | | |
| 村岡 秀雄 | 柴田 良作 | | |
| 三年 辻川龍太郎 | 廣島藤太郎 | | |
| 宮川 清 | 佐久間富雄 | | |
| 松本 守一 | | | |
| 小財龍太郎 | | | |
| 瀧上 昇 | | | |
| 松村 惠三 | | | |

校友會諸兄に謝す。余りにも芳しからざる我が部の記録を此所に列記するに忍びない。我等の心中を察せられよ。だが、我等は全力をあげて戦つて来た。それこそ死を賭して頭張つて来た。我等の苦闘、他のどの部にも見られぬ命をか

ては折角身体に注意して眞剣に。さらば

(橋本、島本、上田記)

端艇部部報

春三月吾が部は前年度に於て大なる功績と大なる部回復の努力とを残された久木前主將を始め西田、加藤、林、安田の諸士を送り大なる打撃を蒙りぬ。然し吾等は光輝ある傳統的端艇部の爲、嘗ての黄金時代再現すべく赤鬼健兒の意氣の爲奮然起ち其の光りを、輝きを、名譽を四海に擴げんものと部長理事諸先生を始め委員の努力に依り猛然として来る可き戦ひに備へる可く猛練習を開始したり。

本校創立記念日端艇部

主催校内漕艇大會之記

五月一日!! 吾等が期待の當日、空は長閑に晴れ渡り、彦根港灣の上を微風流れ小波立つ水上、三色の旗ははためき絶好の端艇日和、太陽の和やかに照る下に、轉る小鳥も春を謳歌し、此の良き日を祝ひ讃え、喜びに充ち居るが如し。

諸先生始め役員諸君によりて準備完了。

けての苦しい努力に免じて、我が部の今年の不振を許して貰ひたい。まかり違へば命をなくするか不具者になるかも分らない柔道部員のあくまで眞剣な努力に免じて許して貰ひたい。

更に部員の弟等に告ぐ。

夏は夏で土用稽古、冬は冬で寒稽古、春、秋は勿論の事、雨の日も風の日も年中殆んど休む暇なしに苦闘し續けてくれた弟等、我等は諸君に何といつて感謝してよいか分らない。

我が部の不振を挽回せんが爲に、我が部後年の目ざす黄金時代建設のよき土台を造らんが爲に我等は諸君に辛く當つた事もあつた。諸君も泣けるやうな時の何度もあつた事を覚えてゐる筈だ。嗚そ此の我等を恨んだ事だらう我等としても恨れたくはなかつた。併し最後の目的達成の爲の手段は其の道たゞ一つしかないのだ。此所に於て最上級に立つ我等の苦哀を察して貰ひたい。

諸君は強くなつた。決してお世辭ぢやない。良き土台を造つた我等は心から嬉しく思つてゐる。そして近き將來に來るもの、我が柔道部制覇の時代が確認されるのだ。目の前に見え

突如!! 春の朝の空氣を破つて響く號砲と共に本校創立記念日の意義ある漕艇大會の幕は切つて下されぬ。

見よ!! 漕上を、而して吾等健兒の逞しき腕を以ての力漕、又力漕を。その頼母しき力強さを見る者一人として緊張せざるを得ざる熱と意氣とを!

やがて各風、各部の団体レース行なはれるや、レース、氣分最高調、丘に於ける聲援舵手の腹からの叫び、渾然一つとなり春の四邊に轟き、天地覆さんばかり。此れぞ海國男子の意氣、赤鬼魂の發露に非ずして何ぞ。

終日水とるは若人の叫び響けり。

斯くして早や水上には聲なく太陽は西の空を焦し鳥は時に歸る時、美しの若人の戦ひも終了し金龜城も夕のやに包まれる時、天皇陛下萬歳を三唱し芽出度く榮ある創立記念漕艇大會も夕の暮に閉されぬ。

彦根高等商業學校主催 近府縣中等學校漕艇大會 出場之記

初夏! 我等の前には新緑の草木が、空には雲雀が樂しげに初夏の訪れを謳歌し、燦々た

てゐるのだ。

更に弟等に告ぐ。決して不平の心を懷いてはならぬ。我が部と他の部と比較してはならぬ。柔道部は苦しい、他の部が雨日のために練習を休んでゐる時でもあの固い冷たい畳の上で血だらけになつて練習せねばならぬ。だが其の苦しい中に柔道の意義があるのだ。其の苦しさを押し切つてこそ心身の鍛錬は出来る。苦勞なしには人間は何事をもなし得ない。次に拙いながらも、我等の体験から、もつと立技即ち投る技を練習してはどうだらう引込む事の出来ない制度のもとでは寝技は第二だ。第一が立技である。寝技ばかりを練習してゐた我等が、良い例だ。これから少し立技の方を研究して貰ひたい。それでも先生が寝技といはれたら其の方に精進するもよいけれど。

愈々親しんで来た諸弟と御別れするんだと思ふと悲しい寂しい氣がする。が併し我等の造つた土台の上になん立派な建物が築かれることかと思ふと嬉しい。たのもしい。

諸君頭張つてくれ給へ!!! 黄金時代建設を目ざしてひた押しに進んでくれ給へ。我等最後の願ひである。

る光芒を凡てのものに投げかけ、地には白い
菜の花や紫の蓮華は今を盛りと咲き匂ひ、之
等の花々の化身の如く黄色い胡蝶が嬉々とし
て花から花へと蜜を求め、花の匂ひ、若葉の
匂ひ、土の匂ひ……等が名状し難い一つの
微妙な初夏の匂ひとなつて、あたりに鬱鬱せ
る時となりき。人々享樂にふける時、我等は
此所に新メンバー編成猛練習に入りたり。

五月七日 新メンバー編成後僅か十有餘日
本年度競漕大會出場第一回目、初めて我等の
腕を力を示す時は来りぬ。此れ彦根港灣
に於ける彦根高商主催の漕艇大會なり。此の
日や、天晴れ風なく波瀾驚かず絶好？コンデ
イションなり。コース八百上下天光。

過ぐる年々玉と碎けし先輩の悲憤を思は
我等の胸はうなり心は復讐に高鳴れり。一同
意氣揚々、多數の應援團に送られて會場に向
へり。會場に着きて相手如何にと尋ねれば、
津中學なりと言へり。お、津中學か！ 去る
昭和四年京都帝國大學主催全國大會に彼校と
第一回戦にあたりて大勝を博してより昭和五
年、昭和七年と敗北の憂をおはされし強敵に
して恨み深き學校なり。さては津中學と組ん
だりや。來らば來れ駒の蹄で蹴散らさん。臥

我等は俯首して校友諸君の御宥恕を乞ふの
み。「來り見よ！ 八月の我等の大會に於ける
活躍を！」と我等は悲憤裡に大會場を後にせ
り。青天を仰げば日輪は、我等の勞を謝し、
一層の奮勵を望むが如く我等の頭上に輝けり
時正午。

因にクルーは
舵手 松本 清
整調 深田 太郎
五番 渡邊 弘
四番 丸岡 芳之
三番 三輪 久左衛門
二番 井上 顯 尙
艇軸 北村 辰夫

滋賀師範奉公園主催 漕艇大會出場之記

春の雨、音なく降る五月二十一日!! 此れぞ
吾等が彦根高商漕艇大會に遅れを、慘なる成
績を残した日より待望の恨みを晴らす可き日
なり。吾等が先の不覺を覺ゆる時傳統的精神
赤鬼魂の熱血の脈々として此の鍛えし鐵腕を
流るゝを覺ゆ。吾等は日淺きにも關らず風雨
、日没を念頭に置かず奮闘、努力なし來つた

新嘗禮。今までひたぶるに仇うたんと、期し
たりし學校なり。望みたりし學校なり。我等
は、我等先輩が全國の湖漕を掌握し勇名を天
下に馳せたる偉業を慰む再び當時の赫々たる
彦中端巖部の名聲を挽回せん門出として、必
らずや燦然たる彼の大旗を湖東の地におかん
事を期し先ず恨み深き津中學を一蹴せん事を
誓ひたり。

スタート。つと兩岸を見ればお、眞黒なる
洋服が！ 彦中諸君が！……應援歌を合唱し
てくれてゐる……必ず勝つぞ！ と唇をか
みてスタートの合圖を待てり。一瞬の靜寂！
ドン!! 戦の幕は切つて落されたり。一本! 二
本! 三本! ……スタートの調子極めてよけり。

暫時並行。
突! 「ミドルヘビー」の一撃。我等得意の
ミドルヘビーなり。スイツ、スイツ、スイツ
見よ。

我等の一シートニシートと敵を壓し行くを
而してミドルの終る頃は已に約一艇身先んじ
たり。彼はと見れば初頭より少しも變らざる
平靜さ。依然同じ調子にて續き來る。と。此
所に練習不足の結果があらはれ我が艇のスピ
ードが、おくれたり。オールがみだれたりや
るが如き戰慄心起るのみ。

縣下の蒙今津中學と同宿せる我等は腕に自
信を持ちし我等選手常に彼に比べて朗らかな
り。時過ぎ番組は決定されぬ。我等と交を交
ふ可き相手と同宿の今中なりとは、何と言ふ
神は悪戯好きであらうや。大敵と見て恐れず
小敵とて輕んぜず只我等には全力を其の一戦
に注ぐのみ。折から吹きしける比良嵐に寒風
一入胸を劈く雨中を、腕背背後にある七百の
健兒の精神そのものゝ如き此の怪腕に、彦根
武士の双を握り躍る胸を抑へて競艇に乘れり
ランチに引張られスタートに就く。只我等
の頭には母校の名譽、七百の健兒諸君の姿、
渾然として往來するのみ。

萬事用意完了! 「用意よろしいか」審判艇
からの聲、横に今中大商を睨めつけ合圖を待
つ。
突如!! 雨中の空氣を震して「ドン」と鳴れ
り。スタートは切られた。三艇共に出づ、見

見る間に敵の聲を完に横に聞けり。
「ラストヘビー」は宜せられたり。我等と
は漕げり! 漕げり! 一心不亂!! 自分を
忘れ湖上も忘れ、敵を忘れ……唯漕いだ!!
死を賭して戦へり!!
兩艇なほも並行。一進一退。鼓々相摩す。
「ゴール」號砲一發!
勝つたか?! 敗れたか?! 審判の聲を求め
たう……。

「第一着。津中學。タイム三分三二秒」
「第二着。彦根中學……」
あゝ敗れたり。門出の一戦に敗れたり。
……

「かまはんよ。かまはん。今度がんばれ!!」
應援の諸君になぐさめられる言葉。涙!! 涙!!
動哭する我等。あゝ選手のみが知る此の涙!!
——×——×——

津中學の牙城にせまりし我等。天は我に利
あらず……。
應援下さつた諸君。御聲を多謝す。
練習僅か十餘日の不足を以てあれだけつい
て行つた我等。しかし敗れた。敗れた我等に
又、なぐさめの言葉まで頂戴し感謝にたへず

よ!! 此の滑り出しを!! 我等は悠々として進む
スタートはすぎたり。ミドル、見よ大商を、
遙か後方にあへぎつゝ來る彼の姿を!! 只相
手は今中のみ、我等は勝つんだ、死んでも勝
つんだ、否勝たなければならぬのだ。
ラスト、ラストヘビーはかけられぬ。ピッ
チは見る／＼上り艇速頓に加はりぬ。然し流
石今中、一進一退、「えい死ぬんだ、死んぢ
まへ」

コックスの聲、應援の聲、何一つとして耳
に聞えず只無二、無我夢中力のある限り、腕
の折れる迄漕ぎぬ、號砲一發萬事終れり。
何れが勝つたか? 嗚呼天は捨て給はず、
我等は勝てり。遂に勝てり。
戦績左の如し(コース一千百米)
大津商業 三着
今津中學 二着

本 校 一着 タイム五分一秒上。
來る可き戦ひは優勝戦なり。相手は關西の
雄御影師範なり。御影何ぞ恐るゝに足らん。
我等のベストを、死力を盡す事のみ。
雨は益々降り頻り一時休憩、疲れ未だいえ
ざるに再び艇上の人となりぬ。見よ、御師の
悔りの眼と落着ける態度とを!! 腕で負けて

も意氣で勝つのだ、勝てないまでも正々堂々と迫るのだ。我等の心中は皆斯く思ひつゝスタートに就く、「用意」「ドン」見よ御師のスタートの速き事を、くそ、見ていろ今に、如何に速まりあせれとて、練習日尙浅く、体力の續かざる我等、如何ともする能はず。

許せ！七百の健兒よ！我等は此の上は來る可きに於て此の許しを得んのみ。

因に結果左の如し。

御影師 一着 タイム四分五四秒
本校 二着 五分二二秒

メンバー

舵 松本 清
整 深田 太郎
五 大村 耕太郎
四 丸岡 芳之
三 三輪 久左衛門
二 井上 顯 敏
軸 北村 辰 夫
M 渡邊 弘

祝さん哉、此の日、水無月十一日初夏の順風湖面を撫る時再度の遠征、是の日、天は清澄、順流瀧田の流れに、銀へに銀へし、練りに練りし、吾等が鐵腕を揮ふ時、恨は深し遺根は長し瀧田の面、大敵何者ぞ、いでや吾が怪腕で蹴散らさん、参加校實に十校、何れなりと來らば來れ、吾れに此の鐵腕と赤鬼魂あるを知るや知らずや。

第一回戦！不戦一勝、天は吾れに絶好の機會を！ 此れぞ好き腕ならし、吾等スエブンは悠々乎として、各校のスパイの眼の光る所を！ 數多の觀衆の注視の中を！ バツトフアーも出來る限り腕も五体も伸し行く、吾等、見る者又頼母しの感を抱くばかりの落着き。

タイム六分一秒！ 是れ吾等が戦績に非ず敵を欺かんが爲の戦法なり、第二回戦！ 嗚乎！ 大商！ 諸君とて夢々忘れはされぬいだらう、あの大商、先輩をして苦肉の嘆を嘗めさせし大商！ 見よ！ 今に何んて恨みを忘るゝものか。

第三高等學校競漕大會 出場之記

二者、物凄き意氣、鼻息を以てスタートに着く、見よ、あの大商の侮りの眼を！

吾が選手の復讐にもゆる瞳とを！

嵐しの前の静寂！ 突如！ 轟然たる號砲一發、ツーツーツー、スタートをもつて誇る大商、何を今に、吾等は斷然斷然尾行主義以て彼等の疲勞を待てり、ミドル！ 今だ、今だ、突如、彼に先じてコックスのミドルへビイ、見よ早まれる吾が艇速を！

併し接戦又接戦、肉迫又肉迫、抜く事半艇身、彼もざるもの追迫のものすこさ、コックスとコックスの眼の争が觀衆の聲も聞かばこそ……。

遂にラスト「勝て」「死ぬ」の叫び……：號砲一發！ 同時ゴールイン。

見よ！ 大商の喜ばしき顔、万才と叫んでゐる顔を！ 然し天は矢張り、吾等に恵みを垂れ給へり。勝つたんだ！ 吾等が。

此に依ても如何に接戦なりしや賢明なる諸君はお察しの事と思ふ。

觀衆の拍手、歡聲、水を振はし比良の山に轟き響く。

吾等は喜び感謝、只、涙あるのみ。來る可きは準備勝、相手は御影師、恨多き

御影師。

然し吾等には大なる疲勞あり、何も語りたくなし、許せ諸君、喜びの後に悲あり。期待せよ！ 吾等の奮闘を！

戦績

二回戦

本校 1 タイム 五分二十七秒

(因に本大會のベストタイム也)

大商 2 同 三十二秒

準決勝

本紙 2 五分四十二秒

御師 1 タイム 五分二十九秒

今津遠漕の記

五月二十一日に開かれし奉公團主催近府縣中等學校端艇大會に於て、或は六月十一日に開かれし三高主催關西中等學校端艇大會に於て、御影師に耐久力有無なる原因によつて力漕の甲斐なく遂に敗れし我等は、京大主催全國中等學校競漕大會が八月六日大津石場ヶ濱にて舉行せらるるとの飛報に接し、雀躍して金龜武士の腕前いざ示さん！と意氣込み喜びたり。

六月十七日、議一決し、放課後直ちに遠漕

の壯途に上りぬ。理事渡邊先生同乗の上、一途今津をさして進む。此の日天氣晴朗にして絶好の遠漕日和なり。

壯途の主眼は耐久力を付けることなり。始め三十分のロングを続け、多景嶋までノシストップにて上陸、しばし休息の後、今津目指して一直線に突きすすむ。十分、二十分或は三十分のロングを引き、二本漕などもやり、漕法を研究しつつ、乗艇後五時間を経て午後六時着なく今津につく。直ちに今津中學の艇庫に艇「ナガラ」を繋ぎて上陸。

目指せしなつかしの今津に上陸して我等は大津横断征服の感にほくそ笑みたり。今中の端艇部の先生方や生徒諸君と打ちつれて薄暮の中を、今宵の宿舎今中宿舎へと急ぐ。

夕食、風呂、散歩を終へて後九時就床。

六月十八日、此の日亦天氣晴朗なり。午前中体力を養ひつゝ濱に出て、小鮎の網引きを見學して午後一時意氣物凄く今津出發。

一氣に竹生嶋に向ひ、一時間休息の後亦乗艇を指して一直線に。此の頃より空曇り折からの東風に波は荒立ちたれど、元氣溢盛尙ほオールに力を入る。而れども横波を恐れ

長濱目指して進む。竹生嶋出發後一時間、風はげしく、波荒くサナガラ艇は一葉の木の葉に似たり。

波は舷を越えて艇内に入り頭よりビシヨヌレになる。折から用意の帆を張り、風を利用してセイリングをきかし、漕手の疲勞を休めしむ。

この時漕手の努力、苦痛實に察するに餘りあり。風頗る激しく、波荒立ちて我等の最も苦手とする天候なり。而れども何物か選手の意氣に抗するを得ん。午後七時過ぎ彦根につきたり。宮原先生の喜びや察すべし。荒波と戦ひ、漕手は非常に疲勞したるも努力に次ぐ努力を以てし、互にはげましたし、オールを握りしめたる様實に涙ぐまじきはかりなり。

斯くて我等の壯圖は終り、自信はいよ／＼強く、戦の日を指をり數へて待ちたり。

一九三三、一一、二五

夏季練習之記

彦根高商、奉公團、三高の三大會に於て惜なくも敗られし我等は本年度最後の石場ヶ濱の大會に恥を雪がんものと艇速の速やまらん

事を願ひつゝ血の出る如き猛練習を續けたりかくして待つほどに七月上旬飛來る。曰く第三十一回全國中等學校優勝競漕大會は例年の如く、八月六日大津石場ヶ濱に於て舉行せらる。此處に於て七月十四日より我等は例年通り片原の松盛館に合宿する事となれり、廿三日までの浦學はこゝよりし、朝まだきより起き出て、懐しき艇庫へと一走り走り、直に清き歴史の漂へる満々たる水と、東天高く聳ゆる金龜城を見渡して必ず磯山岬まで漕ぎ出て、直ちに引返して、二本漕、力漕等を以て、その日の腕馴らしをし、愛艇ををさめて、合宿所に歸り、此處で朝食を済まし、學校に歸せ向ひ、放課後はバック豪上にて漕法を研究し、後湖上に艇「ながら」を滑らして猛練習に時を忘れ、餓を忘れ、日中の暑さも物ともせず、流るゝ汗を拭きながら大會を想ひて一漕／＼に身の纏てを忘れ、又しばし湖岸の青松の中で休みて、力強くも日増しに艇速の速まるを樂しみたり。

かくして七月も半過ぎ、暑中休暇も來りて校友は樂しき家庭に急ぎ、河童群は喜々として湖邊湖上に遊べども、我等にはそれにまさる喜あり。日毎に愛艇を湖上に浮べ技を練り

体を養ひ、來るべき晴の日の準備につとめ、殆んど雨の日も及ぶ限りの練習を積みぬ。かくて我等の自信はいよ／＼堅く、赤銅の肌にも赤東魂を宿し、戦の日、一日と迫るを待ちたり。二十三日一先づ合宿を拂ひて、歸宅し、自家より三日間艇庫へと通ひ、猛練習を續け一日は暮れんとする時、我が懐しの艇を艇庫に休めて、歸宅したりき。その酷さは選手のみ知る所にして、他人の知るべからざるものなり。そこに、運動の價値と意義があるのである。二十八日我が槍舞たる大津に向ふことゝなれり。我等選手一同は天を衝かんばかりの意氣を以て波止場へと向へり。併し如何なる神の惡戯であらうか、湖東汽船は我が艇を大津へ引張つて行く事を拒絶したり。我等の不平滿々たりき。而るに部長宮原先生、理事薄木先生の態度たるや如何なるものであつたらうか。

翌二十九日前日と同じく長曾根波止場へと向ひ、此度は何なく汽船は我等を好意を以て引張つて行つて下れり。

第三十一回全國中等學校優勝競漕大會出場之記

京都帝國大學學友會端艇部主催

昨年第一回戦に於て惜敗したる残念さ、無念さをとて忘るるとも、忘れざりし我等は「今年こそは!!」と意氣すてに大津の雲を風靡せるが如くにして、七月二十九日午後、膳所の合宿所に入る。大會當日迄約一週間、此の兵舎より以上殺風景なる合宿所に於て、先輩諸氏の指導の下に、猛練習に、作戦に餘念なし。すてにして敵と爲すは唯、福岡師範、高知師範、御影師範、滋賀師範公團等の四師範學校を以て他無きを知りたる我等は、或ひは食事間も、或は休憩にも「御影何ぞ」怒み重なる「御影何ぞ!!」と絶叫し、赤銅よりも黒き腕をたゞきて、たゞひたすらに當日の壯麗を偲び、一日千秋の思ひなりき。

かくて日、一日と過ぐる程に我等の腕は益々冴え、猛烈な勢を以て朝早くから夕遅くまで練習し、その日の成績悪ければ夜おそく迄もベストを盡し、豫定以上の成績を上げ得なければ合宿所へと歸らざりき。されば我等の益々冴える一方にして、燦然たる大旗を湖東

の地に持ちかへらんことを誓ふに足れり。

かくて八月五日、例年の如く、出場選手の懇親會、市公會堂に行はるゝ部長及び選手一同は定刻に出席す。

滋賀縣知事、大津市長及び會長の所感を述べられし後、委員の競漕に關する注意ありて番組抽籤行はる。

我等は以前より、師範學校、特に怨み重なる御影師範を敵として進んで來たるものなれば、他の敵には目もくれざりきしばらくして我が敵は定まれり。

二十五(第一回戦)

御影 師範 赤 一コース
四日市商業 青 二コース
彦根 中學 白 三コース

前記學校中四日市商業は練習タイムより見るに我等と争ふ能はず、我等は一回戦には御影師範を我として、優勝戦の積りで戦ふを要したり。

一同合宿所に歸り、熟議策戦をこらし、「弱者と見て侮らず、強者と見て恐れず」をモットーとして、堅く／＼必勝を誓ひ、明日の早く來らん事を祈りつゝ床につけり。

明ければ八月六日、前日と同じく天氣清朗

として我等の優勝を前祝するが如し。

宮原部長、渡邊マネジャ、松本舵手、等三名代理を以て、入場式及び優勝旗返還式に出席す。

優勝旗返還式を終りて直ちに第一回戦に入る。回を追ふに従つて愈々我等が戦機は熟したり。午前十時我等は合宿所に於てバック豪練習を先輩諸氏の指導の許に行ひ直ちに、縣社膳所神社に詣す。

午前十一時會場へと進む。

正午我等は、先輩諸氏並びに紳士淑女等の深ぐましき應援に、堅く／＼必勝を期して乗艇せり。サリュートを以て例の如く、ランチに繋がれて怨敵御影師範等と共にスタートへ向ふ。此時湖上小波を立て、又絶好のレース日和といふべく、湖上には大小數多の應援舟浮び、老若男女の應援に又も必勝の決心を厚ふしたり。

敵とする二艇の中怨敵御影は仲々あなどり難き敵なりき。さて吾等は最も馴れたる調子にて、スタートに着き他艇の準備の終るを待つ。敵二艇は共に吾がバウサイドに之を見る。

此の日選手のコンディション最高潮に達し

吾等の鐵腕は何物をも挫かずんばおかず。

いざ準備完了!!嵐の前の静けさ!!號砲一發!ドン!!俄然火蓋は切られたり。

急調を以て得意とする御影は、雷の如き音響を發して、すてにスタートに於て我先んずんこと半艇身。されば四日市は?お、これも亦艇がトップを壓して、先頭にあり。然らば吾が艇は?お、見よ!吾等の苦手なるスタートをも物ともせず平靜に漕いでゐる様を!!「三百米突進過!!」スタートに於て我先んじたりし四商は最早すてに吾が半艇身の後方にアヘギアヘギ進み來るを見る。然れども御影は依然吾が半艇身の先に聲あり。

「五百米突進過!!」依然御影は半艇身吾に先じ居たり。併し艇は斷然ミドル主義を取るべくオール折れよとばかり、一本々々力漕して尾行す。

「ミドルヘビィヨ、三十!!」我は御影に少し先んじて叫ぶ「ヨシツタタ」頭張れ!!「死んでしまへ!!」「殺すぞ死ね、漕手の一勢に應ずる叫び!!見よ、俄然吾が艇の急速に進み出したるを見る。御影とトップを並べたるにあらずや!!

これに驚きたる彼は更に急調を以て吾に應

ず。併し如何に彼が急調を以て懸じやうが吾がミドル主義には及ばず。見よ！見よ！！ツ、ツ、ツ、吾がトップの彼を追ひ越え行く壯麗を！！

「七百米突通過！！」此頃四日市商業は遙か後方に霞んで見え、豫想通り御影とのみ戦つてゐる様になりたり。御影は吾をリードせんものと、あせりにあせつて稍々吾が左舷に魅し来るを見る吾等は此處ぞとばかりに應戦又應戦！！「サアモウ最後だぞ」「死ンデシマヘ！！」「死ンデシマヘ！！」「忘レタカコラ！！」と絶叫したり。然れども流石天下に名を負ひし強豪！！二撃吾をリードせんものと急調に次ぐ急調を以て突進す。

「ラストヘビリアト三十！！」吾は敵に先んじて叫びたり。「死ネ、死ネ」とばかり聲を張り上げたりしが、最早口には力なく、腕へ全力は注がれてゐたり。而し我等の力に限りや有らん。此より以上の艇速すてに求め得られざりき。然れども唯餘す所は、死を賭して戦ふあるのみ。我等は決死の努力を盡して漕げり。

ア、早や「ドーン！！」ゴールインの號砲轟く。「後三本ツ！！」吾等は最後まで戦ひぬ。

を直ちに新チーム編制に取りかゝつたのでありました。斯くして三輪君、北村君、渡邊君、深田君等四氏の入部を仰ぎ、本年度のクルーを編制し終へたのであります。

私等は赤鬼魂の意氣に燃え、金龜武士の胸前示さんと、燃るが如き炎著をも物ともせず、専ら「榮冠」目ざして努力しました。

戦ひました！

而るに天なる哉命なる哉私等の日頃の努力報いられず敗寇の主となつたのであります。五月七日高商の大會を初陣として大會に出場すること四回、練習不足のため、或は實力の差如何ともしがたく遂に榮冠を彼等にゆづるの止むなきに至つたのであります。

あれ程に「ベストを盡せ！」をモットーとして苦心に苦心に努力を重ねた私等に此結果は餘りにも無情な天の罰ではありませんか！

愛艇「ナガラ」に身を托し廣漠たる琵琶湖相手に、折れよとばかりにオール握りし逝きし日は意氣高き私等ボートマンの苦しみの思ひ出深き人生の一頁でありました。

敗戦！亦しても敗戦を！私等は無念の涙のはぶり落るのを如何ともなし得ませんでしたし

然れども萬事茲に休せり。

あ、天なる哉 命なる哉！！
唯校友諸賢の寛恕を乞ひ、合はせて先輩諸氏及び應援して下さつた紳士淑女の厚意を謝すのみ。

二十五（第一回戦）

御影 師範 一コース

一着 タイム 四分五十二秒

四日市商業 二コース

三着

彦根 中學 三コース

二着 タイム 四分五十五秒

因みに當日の出漕者は左の如し。

舵手 松本 清（五年）

整調 深田 太郎（五年）

五番 大村耕太郎（四年）

四番 丸岡 芳之（五年）

三番 三輪 久左衛門（五年）

二番 井上 顯 敏（四年）

艇軸 北村 辰 夫（五年）

マネジャー 渡邊 宏（五年）

松本、渡邊、北村、三輪、丸岡記

た。

この涙と特有の赤鬼魂を以て敗者ながら四年以下の諸君に一言述べたい。

諸君はスポーツに對して冷酷ではないでしようか？

何故諸君は部に入らないのですか？

勉強は無論、運動に於ても彦中の名譽のためには頭張らうといふ意志はないんですか？

否！諸君には赤鬼健兒の血は流れてゐる筈です、流れてゐなくてはなりません。

理解して下さい！

練習は十分にしてみても部員が赤字で選手に不足を來たした缺點が敗戦の大因となつたのです。

乞ふ諸君！「選手の赤字」を除いてはくれませんか！

最後に榮ある彦中端艇部史の一頁に消すべからざる汚點を附したるを御許し下さい。

（一九三三、一一、二五）

十一

十一

十一

端艇部

| | |
|-----|---------------|
| 部長 | 宮原先生 |
| 理事 | 薄木先生 |
| 同 員 | 渡邊先生 |
| 委員 | 丸岡 芳之 |
| | 三輪 久左衛門 |
| | 井上 顯 敏 |
| | 大村耕太郎 |
| | 清水 良作 |
| | 北村、深田 |
| 部 員 | 五年松本、丸岡、三輪、渡邊 |
| | 三年 清、水、小川、福田 |
| | 二年越、漢 |
| | 以上 |

去るに及びて

端艇部委員 五年 丸岡 芳之
不肖、私は校友會誌の一ページを借りて、諸兄の御宥恕を乞ひ、併せて懇切なる御後援に對して、心からなる感謝の意を表します。櫻花爛漫として衆鳥相鳴し、人心陽蕩たる四月に、私は松本君と共に重鎮河合君なき後

野球部々報

選手

| | |
|------------|-------|
| 五年(主將)原 重信 | 小川福太郎 |
| 四年 西川 寛一 | 太田 元夫 |
| 三年 高橋 巖三 | 中辻 政造 |
| 二年 木野戸勝彦 | 安居 憲三 |
| 一年 上杉 襄次 | 太田 英夫 |
| 馬場 兼吉 | 川村 徳次 |
| 門野 繁藏 | 大日方正明 |

我が部は昨年度縣下のナンバワンと稱へられし松居遊撃手、堤三壘手、及び布施投手を送り出し又中川一壘手の退部により一時に大打撃を受けたれども直ちに新チームを組織して猛練習を開始し前年度に於ける成績を凌駕せんものとベストを盡したり。

縣下リーグ戦の記

第一回戦 本校對彦根工業
昭和八年四月二十二日若葉萌ゆる彦中グラウンドにて戦ふ

川川 戸田居辻村橋 36 14 9 23 12
 本 校 西小 原野 木太安中上高 豊島打壘 球
 先 8 3 2 7 6 1 5 4 9 打得安盗四球
 第二回戦本校對虎姫中學校四月二十三日
 十三A對二の大差を以て大勝す
 第三回戦彦根商業學校と對戦する
 四月二十九日

校 川川 戸田居辻村橋
 本 西小 原野 木太安中上高
 8 3 2 7 6 1 5 4 9
 彦 島崎田本比川谷村中
 7 2 川吉藤 1 日 6 本 3 仲 5 北 9 田

39 8 10 3 9 7 8 4
 點打壘振死壘策 本壘打太田、藤本
 打壘安盗三壘失 三壘打安居、藤本
 33 4 4 2 4 5 1 6
 第四回戦本校對長濱商業四月三十日長商グラ
 ソド本校先攻で開始した。

縣下リーグ戦優勝之記六月二十五日
 本校對八幡商業、心なる懸賞によりて早くも

さしにも廣い球場も満員で有る、抽籤によりて午前九時より八商と午後四時より大津商業と戦ふ事になれり。
 本校對八幡商業
 午前九時より球審西田氏、壘審村井氏、井狩氏三氏審判の本に八商先攻にて開戦す
 第一回(八商)寺本遊撃強襲安打に出て續く島田の左翼頭上を抜く三壘打に生還石井三飛寺田右飛、深尾三振に止みしも一塁を先取せらる。
 (本校)小川第一球目を右翼右に安打して出て續く、西川右中間を抜く大本壘打を襲飛し堂々生還原三振木野戸四球に出て二盗に成功安居三振太田の三遊間安打に木野戸三進太田直に二盗走者二、三壘の好機なりしも川村の三振に空く我軍逆に一塁をリードす(八商一、本校二)
 第二回(八商)塚本四球に出てしも友政の投簡に二壘にて封殺山樾二壘失に出てしも辻の三壘に又もや二壘に封殺寺本捕手前ゴロに空し。
 (本校)上杉三振、高橋一壘、小川三振に無爲(兩軍〇)
 第三回(八商)島田三壘、石井三振寺田も三

り二點を回復せしめ及ばず始終終火を吐く如き接戦の結果八對六を以て勝利は我軍に擧る。残るは大津商業のみ。

振。
 (本校)石川四球に出て直ちに二盗原三壘、木野戸三振すれども安居の左中間三壘打に西川生還太田の一壘強襲安打に安居も生還川村投簡に終りしも又もや二點を加ふ(八商〇、本校二)
 第四回(八商)深尾四球に出て塚本二壘失友政の投手前線打に送られ山樾の内野安打に深尾生還山樾一、二壘間に挟殺されしも一壘手の暴投に塚本生還山樾は三壘に捕手よりの投球に刺さる、辻遊撃失に出てしも寺本投簡に終りしも二點を回復せらる。
 (本校)上杉四球高橋遊飛、小川の遊簡に上杉二壘で封殺かと思はれたが二壘手の落球に間一髪セーフ、西川の中堅前安打に小川二壘に封殺、西川二盗、原四球に満塁の好機なりしも木野戸左飛に無爲(八商二、本校〇)
 第五回(八商)島田二飛石井遊簡、寺田一壘(本校)安井、太田共に投簡、川村左飛(兩軍〇)
 第六回(八商)深尾遊簡一壘大暴投に二進、塚本の投手前線打に三進友政とのスクイズ成功して生還山樾投簡に終りしも一點を加へて同點となる。

は遊撃失に出てたが高坂二飛。
 (本校)安居中飛、太田遊簡、川村二壘(兩軍〇)
 第三回(大商)勝見二遊間安打し森本の打球にあたりアウトとなつたが瀧川の左中間を抜く本壘打に二點を先取したが後進續かず。
 (本校)上杉投飛、高橋二壘、小川遊簡(大商二、本校〇)
 第四回(大商)佐々木三振、建部右飛、高坂四球に出てしも勝見に二壘に封殺。
 (本校)西川原とも三遊間に出て木野戸の二遊間安打で無死満塁の好機到來し彦中懸賞團總立となり安居の二壘に西川本壘に封殺されたが太田の三遊間安打で二者生還し同點となる、安居二壘牽制に死し川村中飛にやむ(大商〇、本校二)
 第五回(大商)森本三振、瀧川右越二壘打し三盗せんとし一壘からの好投にさゝる。藤田四球に出てしも安澤三振。
 (本校)上杉三飛、高橋四球、小川遊撃右を抜く安打し西川打者の時捕手の二壘暴投により三壘を突き中堅の又も暴投に生還、西川中飛、原四球木野戸右翼安打で二死満塁となり安居の中前安打で小川、原生還し太田は死球

(本校)上杉二壘失に出てしも高橋の遊簡に重殺を喫す、小川遊飛(八商一、本校〇)
 第七回(八商)辻左翼右を抜く二壘打を放ちて出て續く寺本四球に走者一、二壘に寄りしが島田左飛、石井三振、寺田二壘に無爲
 (本校)西川四球に出て二盗、更に三盗せんとして刺さる、原三振、木野戸左飛(兩軍〇)兩軍四對四の白熱戦を演じ観衆をして汗を滂らしむ。
 第八回(八商)深尾三壘、塚本中堅失友政左飛、山樾の三遊間二壘打に走者二、三壘のチャンスなりしも辻三振に無爲
 (本校)安居右翼左を抜く二壘打を放ち三盗すれば捕手暴投して生還、續く太田又もや中堅頭上を抜く三壘打を襲飛し川村の左翼前安打に生還上杉遊飛、高橋の遊簡に川村二壘に封殺、二壘手重殺を急いで一壘に暴投して走者二進す、小川三壘失に出て直ちに二盗、西川の四球に二死満塁の絶好のチャンス、原遊簡失に高橋生還、木野戸四球に小川生還安居の一飛に止みしも我軍四點を加へて大勝決す。
 第九回(八商)寺本三壘直球、島田三壘一壘暴投に二進石井の左中間三壘打に生還寺田三振、深尾遊撃失に石井生還、塚本の中飛に終

川川 戸田居辻村橋 36 14 9 23 12
 本 校 西小 原野 木太安中上高 豊島打壘 球
 先 8 3 2 7 6 1 5 4 9 打得安盗四球
 第二回戦本校對虎姫中學校四月二十三日
 十三A對二の大差を以て大勝す
 第三回戦彦根商業學校と對戦する
 四月二十九日

は遊撃失に出てたが高坂二飛。
 (本校)安居中飛、太田遊簡、川村二壘(兩軍〇)
 第三回(大商)勝見二遊間安打し森本の打球にあたりアウトとなつたが瀧川の左中間を抜く本壘打に二點を先取したが後進續かず。
 (本校)上杉投飛、高橋二壘、小川遊簡(大商二、本校〇)
 第四回(大商)佐々木三振、建部右飛、高坂四球に出てしも勝見に二壘に封殺。
 (本校)西川原とも三遊間に出て木野戸の二遊間安打で無死満塁の好機到來し彦中懸賞團總立となり安居の二壘に西川本壘に封殺されたが太田の三遊間安打で二者生還し同點となる、安居二壘牽制に死し川村中飛にやむ(大商〇、本校二)
 第五回(大商)森本三振、瀧川右越二壘打し三盗せんとし一壘からの好投にさゝる。藤田四球に出てしも安澤三振。
 (本校)上杉三飛、高橋四球、小川遊撃右を抜く安打し西川打者の時捕手の二壘暴投により三壘を突き中堅の又も暴投に生還、西川中飛、原四球木野戸右翼安打で二死満塁となり安居の中前安打で小川、原生還し太田は死球

